

多可郡黒田庄町

岡 遺 跡

— 県道黒田庄滝野線道路改良工事に伴う
埋藏文化財発掘調査報告書 —

1993年

兵庫県教育委員会

多可郡黒田庄町

岡 遺 跡

— 県道黒田庄滝野線道路改良工事に伴う
埋藏文化財発掘調査報告書 —

例　言

1. 本報告書は、多可郡黒田庄村岡字二ノ門・池ノ下・前田にかけて所在する「岡遺跡」の発掘調査報告書である。
2. 岡遺跡は、県道黒田庄瀧野線道路改良事業に関連して発見された遺跡であり、兵庫県社上木事務所の委託を受けて、平成2・3年度に兵庫県教育委員会が発掘調査を実施した。
3. 平成2年の全面調査は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 平田博幸・甲斐昭光が担当し、平成3年度の字出口・前ヶ内・二ノ門地区の確認調査は、同 水口富夫・中村 弘が担当した。
4. 整理作業は、平成4年度に兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所において実施した。
5. 調査現場での遺構等の実測・写真撮影は調査員および補助員が行い、空中写真撮影は、株式会社ワールド航測コンサルタントに委託した。
6. 金属器の保存処理作業は、兵庫県教育委員会 加古千恵子・遠藤七都子が兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所にて行った。
7. 本書の執筆・編集は平田・甲斐・中村・古谷章子が行った。
8. 本書で示す標高値は東京湾平均海水準を基とし、方位は座標北を指す。磁北はこれより西へ $6^{\circ} 40'$ 振っている（昭和55年現在）。
9. 第3図で用いた地図は、国土地理院が昭和56年に発行した1/25,000地形図「中村町」・「谷川」を使用したものである。
10. 遺物は本書掲載順に通し番号を付けている。ただし、石器にS、鉄器にMを番号の頭に付けて土器と区別している。また、遺物の番号は、本文・挿図・図版ともに統一している。
11. 図化した須恵器、磁器、土師器・弥生土器の種類を区別するため、実測図の断面は、それぞれ、黒塗り、網目、白抜きに表現している。
12. 本報告にかかる遺物は、兵庫県教育委員会魚住分館に、写真および図面は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所に保管している。

本文目次

第1章 調査の経過	
第1節 全面調査の経過	1
第2節 確認調査の概要	2
第3節 整理作業の経過	4
第2章 遺跡をとりまく環境	5
第3章 調査の結果	
第1節 調査の概要	11
第2節 二ノ門地区の調査	17
第3節 池ノ下地区の調査	19
第4節 前田地区の調査	25
第4章 まとめ	40

挿図目次

第1図 確認調査位置図	3
第2図 遺跡の位置	5
第3図 岡遺跡周辺の主要遺跡	6
第4図 天神前古墳群の現状	8
第5図 岡古墳群の現状	9
第6図 兵主神社と城山	10
第7図 城山採集の須恵器甕	10
第8図 調査区周辺の微地形復元図	12
第9図 二ノ門地区東壁断面	13
第10図 池ノ下・前田地区西壁断面	15
第11図 二ノ門地区構造配置図	17
第12図 二ノ門地区包含層出土遺物	18
第13図 池ノ下地区構造配置図	20

第14図 SK 0 1	2 1
第15図 SK 0 2 出土遺物	2 2
第16図 池ノ下地区包含層出土遺物（1）	2 3
第17図 池ノ下地区包含層出土遺物（2）	2 4
第18図 前田地区遺構配置図	2 6
第19図 SB 0 4 出土遺物	2 7
第20図 P 0 1 出土遺物	2 8
第21図 P 0 2 出土遺物	2 8
第22図 SK 0 3 出土遺物	2 8
第23図 SK 0 4 出土遺物	2 9
第24図 SK 0 5 出土遺物	2 9
第25図 SD 0 3 出土遺物	3 0
第26図 SD 0 4 出土遺物	3 0
第27図 SD 0 5 断面図	3 1
第28図 SD 0 5 出土遺物（1）	3 2
第29図 SD 0 5 出土遺物（2）	3 3
第30図 SD 0 5 出土遺物拓影	3 3
第31図 前田地区包含層出土遺物（1）	3 5
第32図 前田地区包含層出土遺物（2）	3 6
第33図 前田地区包含層出土遺物（3）	3 7
第34図 前田地区出土石器	3 8
第35図 前田地区出土鐵器	3 9

表 目 次

第1表 岡遺跡周辺の主要遺跡	7
第2表 前田地区出土石器観察表	3 8
第3表 前田地区出土鐵器観察表	3 9

写真図版目次

カラー図版 岡遺跡の遠景

- 図版1 岡遺跡の位置
- 図版2 二ノ門地区全景
- 図版3 二ノ門地区全景・SD01
- 図版4 地山の整形箇所・井戸
- 図版5 池ノ下地区全景
- 図版6 池ノ下地区北半部全景・SB01
- 図版7 SK01周辺の遺構・SK01
- 図版8 池ノ下地区南半部全景・池ノ下地区土層断面
- 図版9 前田地区全景
- 図版10 SB02とSD04
- 図版11 SB03・04、SD05
- 図版12 SB05
- 図版13 SB03・04柱穴断面、SD04
- 図版14 SD05南半部・SD05断面
- 図版15 出土土器（1）
- 図版16 出土土器（2）
- 図版17 出土土器（3）
- 図版18 出土石器・鉄器

第1章 調査の経過

第1節 全面調査の経過

岡遺跡の所在する黒田庄町は播磨北部の中心的都市である西脇市の北側に隣接し、中町・加美町とともに多可郡を形成している。同町北側に隣接する山南町は旧の丹波国に属するため、旧国の国境の町となっている。丹波の水上・多紀両郡の山中に源を発する加古川の本流が同町を二分するように南北に流れしており、かつては両国の文化・経済・交通の大動脈となっていた。今ではこうした河上を行き交う荷船の光景を見ることははないが、それに変わってJR加古川線・国道175号線が南北の幹線交通手段となっている。

同町の場合西脇市から延びる国道175号線が加古川の右岸を走っており、町役場等が位置し町内の中心となる喜多・本黒田等の集落の所在する左岸は、県道滝野黒田庄線に陸上交通の多くを頼っている。同県道は加古川左岸の古くから栄えた集落を縫って走る基幹道であり、その布設されている位置などから見て、その開通された時期はかなり古くまで遡ると思われる。ところが逆に活用され始めた時期が古いだけに、その幅員は狭く、路線も地形に則してかなり曲がりくねったものとなっている。こうした現在の交通事情にそぐわない道路状況を改善するために、兵庫県社土木事務所では道路の新設・拡幅・改良等により、通行の困難な箇所・危険な箇所の回避を進めている。今回の岡遺跡の調査も、こうした一連の県道滝野黒田庄線改良工事に伴って実施されたものである。

平成2年当時の黒田庄町内における県道滝野黒田庄線の状況は、西脇市との市町境から村中の門柳川までの間と、岡の兵主神社の北側から本黒田までの間が新設・改良されていた。このため、この両区間を結ぶために兵主神社東手から岡・福地両集落の西側をかすめて南下する路線が今回の新設工事区間として計画された。路線はほ場整備地域内を通過するが、このほ場整備に伴った埋蔵文化財の調査により、岡集落の立地する扇状地ヒとその西側の河岸段丘上に遺跡が存在することが判明したため、路線用地内についても同町教育委員会が昭和62年に妙見山麓遺跡調査会に委託して遺跡の確認調査を実施した。その結果、兵主神社前を門柳に向かう町道から南に約300mの間に遺跡が存在することが判明した。この調査結果を受けて、昭和63年兵庫県社土木事務所より全線にわたる発掘調査の依頼がなされたが、あいにく同年度の兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所の調査予定に余裕がなく、とうてい対応することができないため、同土木事務所ならびに黒田庄町側と協議を行い、平成2年度によく全面調査を実施したものである。

調査の期間中はもとより、その前後においても多大なご協力をいただいた関係諸機関、担当

者の方々、さらには一日も早い道路の開通を期待されておられた地元町民の皆様に、文末を借りて心より御礼申し上げます。

全面調査の経過

約3800m²を測る調査区を、第5図に示したとおり大きく3つに分割することとし、残土処分の都合上、前田地区（北半・南半）・二ノ門地区・池ノ下地区（北半・南半）の順に作業を進めた。調査開始日は6月22日である。

前田地区、池ノ下地区的着手前の状況は、盛土による仮設道路が敷設されており、周辺においては、は場整備工事が完了していた。調査の進行につれて、本来の遺構面が削平されている部分が見受けられたが、は場整備工事の際の耕土層の除去に伴うものと思われた。二ノ門地区的調査前の状況は、極楽寺の存在する独立丘陵の西斜面に相当し、樹木が繁茂していた。

調査にあたっては、機械掘削と人力掘削を併用した。調査期間中は、炎天下の作業となり、前田地区中央部に向かってかなり厚くなる包含層を掘削する必要があったため、掘削作業は困難を極めた。また、前田地区的残土は、その南側の路線内に、二ノ門地区・池ノ下地区的残土は、調査の終了した前田地区内に処分せざるをえず、調査終了後の空中写真も分割された形で撮影することとなった。諸記録作成後、12月26日に現地における作業を終了した。

現地における調査は、平田博幸・甲斐昭光の両技術職員が担当し、西本寿子（補助員）、藤原千代子（事務員）、小林千代美・小林裕子（室内作業員）の協力を得た。

第2節 確認調査の概要

平成2年度の全面調査は、昭和62年度の妙見山麓遺跡調査会による確認調査結果を受けて、その範囲を決定したものである。しかし、路線内の南北両端部には確認調査が実施されていない箇所があり、特に北端部は周知の遺跡である岡・古門遺跡に近接することから、遺跡の範囲を確定する必要があると思われた。

そこで、兵庫県教育委員会と社土木事務所の間で当該地の取扱いについて協議した結果、社土木事務所より、遺跡の有無を確認する調査を依頼されたため、工事に先立って兵庫県教育委員会が確認調査を実施したものである。

調査は、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所主査水口富夫・同技術職員中村 弘の両名を担当者とし、平成3年5月20・21の2日間に行われた。

調査の概要

調査地は前述した平成2年度の全面調査範囲をはさんで、南北の2箇所に分かれている。それぞれの地点において一辺2mの坪を、ほぼ20m間隔で設定することとした。しかし、南側の

地点については、現状では調査が不可能あるいはすでに近・現代の擾乱を受けたため遺跡が存在しないと判断できる場所を避けるなど、現状に合わせた調査区の設定を行った。その結果、調査した坪は北側2箇所、南側6箇所の計8箇所となった。

調査は機械による掘削と、人力による断面整形および精査により行った。以下、それぞれの坪について概要を記す。なお、坪は北から順に番号を与えるものとする。

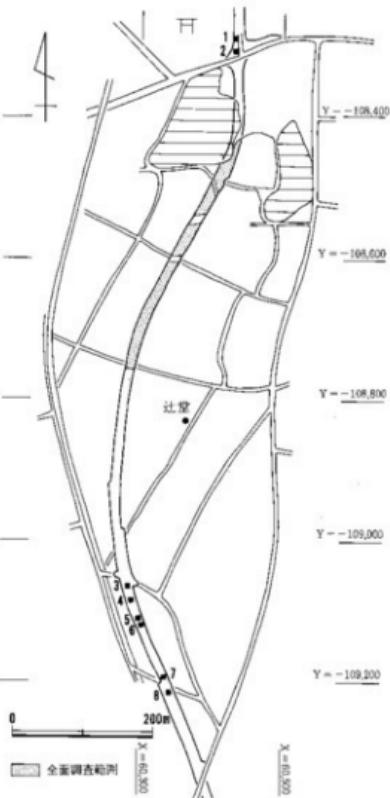
坪1 兵主神社の東側に接する場所である。近年まで建造物があったようで、表土層から60cmまで擾乱されており、コンクリートや瓦、煉瓦などが出土した。この擾乱層の下層には水田土壤である灰色シルトと黄色系の極細砂が堆積していたが、恐らくこの水田層は建造物が構築される直前の近年の水田であろう。さらに

下層の現地表面から1m下には直径20cm程の疊混じりの粗砂が堆積していた。この層からは湧水があったため、それ以下の掘削を中止した。近年の建造物以外の遺構・遺物は確認されなかった。

坪2 坪1の南側14mにあたる。基本的な層序は坪1と同様であり、遺構・遺物についても確認されなかった。

坪3 平成2年度の全面調査区の南側に位置する。この坪からは北側に接して以下の調査（昭和62年度の妙見山麓遺跡調査会による）の坪が認められた。層序は現耕作土と床土の下に灰色系の極細砂が、さらに下層には黒色シルトが堆積していた。この黒色シルトは坪3から坪8にかけて広範囲に認められるものである。その下層には疊混じりの粗砂が堆積しており、湧水があった。遺構および遺物は確認されなかった。

坪4 層序は坪3とはほぼ同じで、上から現耕作土、床土、黒色シルト、疊混じりの粗砂からなっている。ただし、黒色シルトと疊混じりの粗砂との間には灰色極細砂の堆積が認められた。遺構・遺物は確認されなかった。



第1図 確認調査位置図

坪5 基本層序は坪3・4と同じであるが、床上の下の黒色シルトが比較的厚く堆積していた。遺物としては、この黒色シルトと上層との間から12世紀前半に属する須恵器の捏鉢が出土したが、遺構は確認されなかった。

坪6 坪5と層序は同じである。黒色シルトは、上方が削平されていると考えられるにもかかわらず、坪5よりも厚く堆積していた。この黒色シルトの上からは近世から近代に属する遺物が数点出土したが、遺構は確認されなかった。

坪7 坪5・6とは異なり、現耕作土と黒色シルトの間に灰色系の極細砂の堆積が認められた。また、黒色シルトは坪6よりもさらに厚く堆積していた。その下層には疎混じりの粗砂が堆積しており、他の坪と同様に湧水があった。遺構・遺物は確認されなかった。

坪8 現耕作土の下には一部擾乱された黒色シルトが堆積しており、さらにその下層には坪1から坪7までには認められなかった、しまりのよい明黄灰色極細砂が堆積していた。下層には疎混じりの粗砂が堆積し、他と同様に湧水があった。遺構および遺物は確認されなかった。

まとめ

坪1から坪8までの計8箇所について確認調査の坪を掘削したが、遺物が数片出土したもの、遺構の存在を肯定するような状況は認められなかった。坪5から出土した捏鉢は平成2年度に全面調査を行った岡遺跡に関係するものであろうが、現耕作土直下からの出土であるため、出土地点において使用・廃棄されたものと断定することはできなかった。さらに、第8図の微地形復元図からは調査地域の傾斜が比較的きつい状況が読み取れ、周辺の地形観察のうえからも遺跡の存在について否定的である。

以上の確認調査の結果より、範囲内には遺跡が存在しないことが明らかとなった。

第3節 整理作業の経過

出土遺物は、整理用コンテナ40箱であり、大半を占める土器のほか、石器4点、鉄器6点がある。これらの遺物の整理にあたっては、平成2年度の発掘調査と併行して、現地の仮設事務所において土器の洗浄作業を実施することから開始した。

本格的な整理作業は、平成4年度に兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所にて実施した。作業は、遺物の接合・復元、実測図および拓本の作成、写真撮影および図面の整理・トレースなどであり、平田・甲斐・中村を主に、古谷章子・宮田麻子・小川由紀子・佐伯純子・早川亜紀子・蓬萊洋子が担当した。

鉄器の保存処理作業は、当事務所において加古千恵子が実施した。

第2章 遺跡をとりまく環境

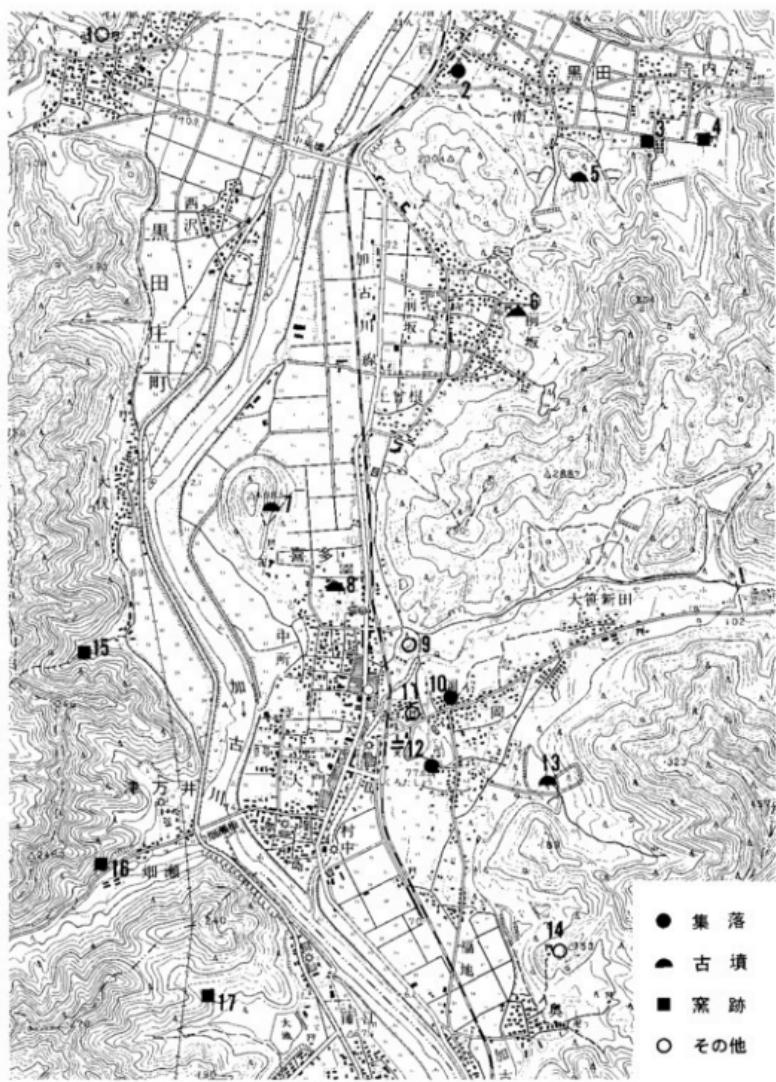
岡遺跡の所在する多可郡黒田庄町は、兵庫県の内陸部、加古川の上流域にある。加古川は県下最大の流域面積をもつ河川であり、町内では東から小苗谷・北谷・門柳の各支流を、西から野尾谷川を合流しながら、その西端を南流している。また、加古川は低い分水嶺で山良川と接しているため、瀬戸内海と日本海を結ぶ内陸の交通手段のみならず、物資や諸情報の移動のハイブラインとしても重要な役割を占めてきた。このことが、後述する杣山の成立や、窯業の発達にも大きな影響を与えたであろうことは容易に想像できる。

黒田庄町は山地の占める割合が比較的高く、現在の集落は、東西両山麓の緩傾斜地、各支流のつくった扇状地や段丘、加古川に沿った自然堤防上に立地している。それらは、加古川右岸の上流から順に、船町・田高・石原・西沢・大伏に大きく分けられ、左岸は順に、小苗・黒田・前坂・喜多・門柳・岡・大門・津万井・福地の各地区に分けられる。以下では、町内の遺跡を時代別に概観したのち、岡地区的地理的・歴史的環境について述べることとしたい。

黒田庄町内で最も古い縄文時代の遺跡には、小苗遺跡（小苗）があり、中期末の土器片と石



第2図 遺跡の位置



第3図 岡道跡周辺の主要遺跡

第1表 岡遺跡周辺の主要遺跡

No.	遺跡名	時代・種類	No.	遺跡名	時代・種類
1	石原経塚	平安時代末	9	城山	
2	黒田庄中学校遺跡	弥生時代前期・終 末期・古墳時代 前期・集落跡	10	岡・古門遺跡	弥生時代後期・鎌 倉時代、集落跡
			11	兵主神社	
3	大山谷窯址	古墳時代後期 須恵器窯	12	岡遺跡	弥生・古墳後期・ 奈良・平安・鎌倉 時代集落跡
4		古墳時代後期 須恵器窯	13	岡古墳群	古墳時代後期
5	坂ノ東1号墳	古墳時代前期	14	福地経塚	平安時代末
6	前坂古墳群	古墳時代後期	15	大伏窯址	奈良時代、須恵器窯
7	喜多古墳群	古墳時代前期 方墳	16	末谷古窯址	奈良時代、須恵器窯
8			17	蒲江・大谷窯址群	鎌倉時代、須恵器窯

匙が出土している程度で、この時代の遺跡の実体については不明な点が多い。

弥生時代前期の遺跡には黒田庄中学校遺跡（黒田）がある。つづく中期には小苗遺跡があり、後期には岡・古門遺跡（岡）で遺構が確認されている。弥生時代終末期には、黒田庄中学校遺跡のほか、円山遺跡（喜多）が知られている。いずれも、遺跡の継続性や規模といった詳細については不明である。

古墳時代の集落遺跡は、黒田庄中学校遺跡で、移動式の竈をもつ住居跡などが検出されているほかは実態が不明であるが、前期・後期の古墳のあり方から、当時の集落の分布がある程度推測できる。

前期古墳は、坂ノ東1号墳・前山山頂古墳・烟瀬古墳（黒田）、喜多古墳群（喜多）、桜丘古墳（石原）、南山古墳（大伏）、百合山古墳（福地）が挙げられるが、実態の不明なものが多い。このなかで、南山古墳・百合山古墳はともに5世紀末に位置づけられるもので、前者からは鹿角製の鉄剣などが、後者からは円筒・形象埴輪などが出土したという。また、福地の南に位置する西脇市・比延地区には、西脇・多可地方で唯一の前方後円墳である岡之山1号墳を始め、前期古墳が集中することは特筆すべきである。このように、町域の南部に、より上位の階層に位置付けられる前期古墳が偏在する点が指摘できる。

後期の群集墳は、町内の各地に築造されており、集落の分布に対応するかのようである。



第4図 天神前古墳群の現状

それらは、小苗古墳群（小苗）、小松原古墳群（黒田）、前坂古墳群（前坂）、天神前古墳群・秋谷池古墳群（喜多）、岡古墳群（岡）、石原古墳群（石原）などであり、加古川左岸に集中する傾向がみられる。このことは、加古川右岸地域が、洪水に度々見舞われるなど、生活条件の上で、より不安定であったことを示す可能性がある。

古墳時代の須恵器窯跡は町内の黒田地区の2箇所で確認されている。大山谷窯址と黒田窯址であり、いずれも6～7世紀代に操業されていたものである。

奈良時代以降の遺跡については不明な点が多い。このため、時代が前後する形となるが、窯跡と経塚について概観したのち、文献史料に残された当地の行政組織について触れることにする。

西脇市から加東郡にかけての地域は、東播北部古窯跡群と総称される須恵器窯跡の集中地域である。古墳時代以降、須恵器の窯跡は分布を広げ、その数も増加する。奈良時代の大伏窯址（大伏）、末谷古窯址（律万井）、鎌倉時代の蒲江・大谷窯址群（西脇市蒲江）をはじめ、西脇市周辺で特に11世紀以降の窯跡が数多く確認されている。このうち、大伏窯址では稜瓶の生産も行っていたことが知られている。

経塚が町内の2箇所で確認されている。石原経塚（石原）と福地経塚（福地）であり、前者は承安4（1174）年の願經があり、後者の経筒には久安5（1149）年の紀年銘がある。

弥生時代以降、列島各地において政治的なまとまりがしだいに形成されるが、古墳時代の開始に前後して、これらの地方勢力は人和地方を中心としたより大きな政治主体との結びつきをもつことになる。

多可・加毛二郡の加古川以東、現在の山東町の篠山川以南と今田町全域および三田市の大谷・大川瀬などを含む広大な面積の山地には、かつて椅鹿山領地とよばれる柏山が存在していた（第2図）。これは、遅くとも6世紀には人和朝廷の直轄山林になっていたとされるもので、のち住吉大社が領有したらしい。豊富な山林と木材の搬出に不可欠な河川の存在を背景に、船材や寺社の建築材を供給していたと考えられている。

つづく律令制への移行期には、地方の土豪層の組織化を前提とした評制が敷かれたことが知られており、当地にも多可評が存在していたらしい。

奈良時代の『播磨国風上記』には託賀郡の下に賀眉・黒田・都麻・法田の四里が記されてお

り、平安時代の『和名類聚抄』によれば、多可郡の下に荒田・賀美・那珂・資母・黒田・蔓田の六郷の存在が知られている。

中世には、当地に這田庄と黒田庄という2つの莊園が存在している。

這田庄は、寿永3(1184)年が文献上の初見であるが、室町時代の史料によれば、黒田郷・津万郷・東条郷の3郷からなることが分かる。このうち、黒田郷は現在の黒田庄村の加古川左岸を中心とする地域に比定されている。這田庄はその後、莊園制の崩壊とともに久我家の支配を受ける黒田郷と、守護赤松義則が支配する津万郷・東条郷に分かれて長く存続するといわれている。

また、黒田庄は現在の町名の由来になった莊園であり、平等院領であった。この莊園は石原地区を含んでいたことが確実で、加古川右岸を中心とした範囲にひろがっていたと考えられている。

最後に、岡地区的地理的・歴史的環境について、少し詳しく眺めることにしたい。

岡地区は、地形的にみれば段丘および門柳川の形成した扇状地で構成されている。この門柳川は現在水量が乏しく、現地表面を深く切り込んでいることから、扇状地については、化石扇状地とよばれる比較的古く形成された地形と捉えられている。なお、今回の岡遺跡の調査では、門柳川の旧流路(SD05)が確認され、扇状地の形成時期を知る資料となった。

岡地区的遺跡は、岡遺跡以外には先述したように岡・古門遺跡と、岡古墳群が周知されている。岡・古門遺跡は、は場整備事業に伴う発掘調査により、弥生時代後期の土壙・溝、中世前期の土壙・溝・柱穴が検出されている。

今回調査した岡遺跡の東方約500mの山麓に立地する岡古墳群は、横穴式石室をもつ6~7基の円墳で構成されている。今回の岡遺跡の調査では、この古墳群と同時期の遺構は認められなかったため、調査区東側のより高い場所に、造墓主体である当時の集落が存在していたものと考えられる。

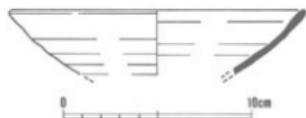
岡地区には、奈良時代に勧請されたという式内・兵主神社が存在する。『兵主神社勧請に関する旧記』には、播磨国司の掾が「播磨国多可郡大志野の岡の城に赴き」、「城の南に森四町余を開き」兵主神社を勧請したとある。岡の兵主神社は、山林・造船の神、航海・戦争の神であり、律令国家権力守護のため軍團・兵庫の守護神として外から持ち込まれた武神を神格としている。



第5図 岡古墳群の現状



第6図 兵主神社と城山



第7図 城山採集の須恵器楕

この兵主神社の裏には城山とよばれる比高差約40mの山があり、これを先の記述にみえる「大志野の岡の城」と同一視し、多可軍團の兵庫とする意見もある。この山頂は平坦であり、 $10 \times 15\text{m}$ 程度の広さをもつ。現在一辺50cm程度の石が2個確認でき、これが建物の礎石である可能性がある。今回、この山頂平坦部の西側斜面で、第7図に図示した須恵器が採集されたことから、少なくとも12世紀頃に何らかの目的でこの山頂が利用されていたことが分かった。

また、今回の調査区のうち、二ノ門地区に東接する部分は、小山池と宮池に東西を挟まれた小規模な丘となっており、現在は福谷山極楽寺が存在する。この極楽寺は、土豪村上氏の菩提寺として天正11（1583）年に創建されたとされているが、この小規模な丘を中世の城館址と考えるむきもあるようである。

本章の最後に、昭和62年度に黒田庄町教育委員会が主体となって実施した岡遺跡の全面調査の結果に触れたのち、第3章において今回の調査結果の記述を行うことにする。

今回の調査区の池ノ下地区の中央を横切るトレントチからは、中世前半以降の溝、奈良時代の大溝などが検出されている。また、前田地区の中央を横切るトレントチならびにそれと直交するトレントチからは、中世の大溝や奈良時代の大形土壌などが確認されている。中世の大溝は今回の調査で検出されたSD04と同一の遺構である。特記すべき遺物として奈良時代の大形土壌出土の円面鏡が挙げられる。今回の調査区の東約100mほどの、小山池の南方に設定された調査区からは、3×3間の掘立柱建物や土壌などが検出されているらしい。

参考文献

1. 喜谷美宣・山尾幸久ほか『黒田庄町史』 黒田庄町 1972年
2. 岸本一郎『播磨・緑風台窯址』 西脇市教育委員会 1983年
3. 神崎 勝『加古川流域の古代史（上・中流篇）』 妙見山麓遺跡調査会 1989年

第3章 調査の結果

第1節 調査の概要

1. 調査区の名称

昭和62年度に黒田庄町教育委員会と妙見山麓遺跡調査会が実施した確認調査の結果を受けて、幅10m、長さ300mの調査区を設定した。この調査区内には用水路や道路が横断しており、これを確保するために、第8図のように調査区を5つのブロックに分割した。

本報告では、これらのブロックのうち、最も北の調査区を二ノ門地区、次の2ブロックを池ノ下地区、南の2ブロックを前田地区というように、対応する小字名によって呼称することにした。また、記述の必要性に応じて、二分された池ノ下地区・前田地区の各2ブロックを、それぞれ北半・南半と呼ぶこととする。

実測等の基準線の設定にあたっては、兵庫県社土木事務所の設置した道路センター杭を使用した。また、地区ごとの造構全体図および土層断面図の対応を明らかにするため、A～Gの記号を付した。以下の記述にあたり、南北方向の位置を説明するために、このA～Gラインを用いる場合がある。

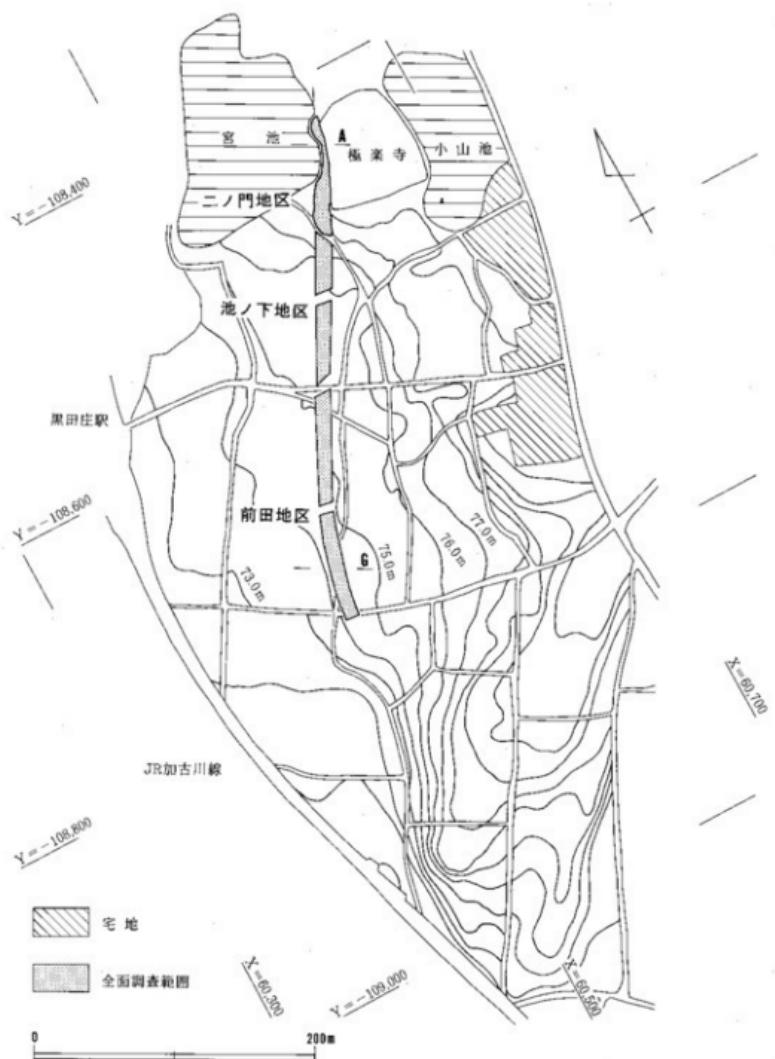
2. 調査区周辺の微地形

岡地区は地形的にみれば、門柳川の形成した扇状地と段丘にあたっていることを第2章で述べた。調査に先立って、当時の地表面のより細かい起伏をよみるとため、調査区周辺における圃場整備前の地表面の微地形分析を行った。

第8図は、社土木事務所から提供された1/1000地形図をもとに作成した1m間隔の等高線と調査区の関係を表した平面図である。これによれば、現在宅地になっている部分から約250m西の黒田庄駅にかけての地域には、高低差が約6mの比較的緩い傾斜の扇状地形が広がっており、この傾斜は調査区の東あたりで緩くなっていることが分かった。

各地区的地形をみれば、二ノ門地区が小規模な丘の西斜面にあたっていること、池ノ下地区が小山池付近から西へ続く比較的広い低地に相当すること、前田地区が扇状地形の末端に位置することが明らかである。また、前田地区の南端部分は、北東から南西方向に張り出す段丘の影響を受けているため、広い平坦地がないことが予想された。

地区ごとの調査結果の概要は、第2・3・4節のそれぞれ冒頭に記すこととし、ここでは各地区的順序および主要造構について述べる。



第8図 調査区周辺の微地形復元図

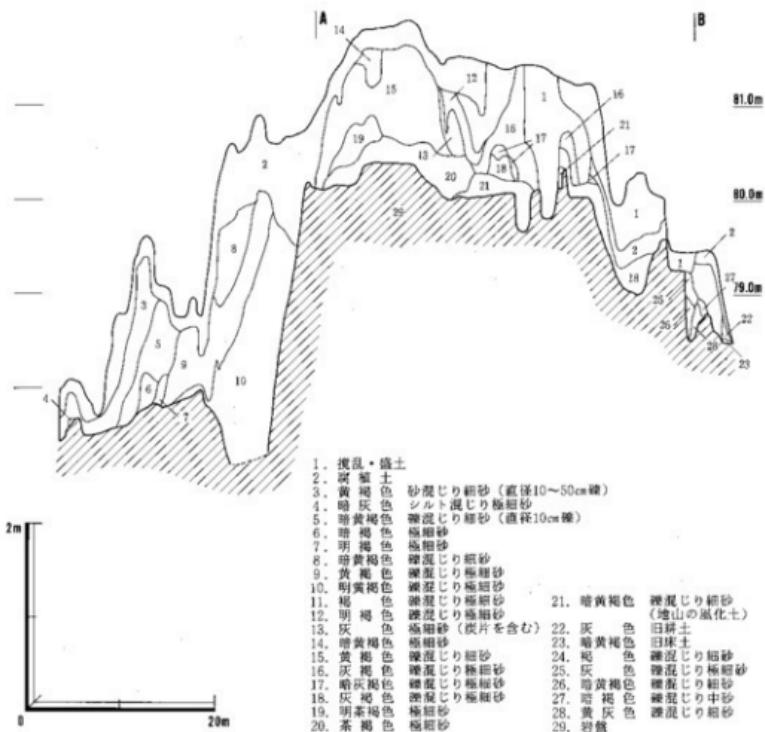
3. 二ノ門地区

第9図は、調査区の東壁すなわち独立小丘陵の西斜面を縦方向に切った土層断面である。

腐植土以下には、直径10~20cm程度の角礫を多く含む流土層が厚く堆積している。ただし、調査区南端は水田として利用され、腐植土以下に耕土と床土が認められた(22・23層)。

主な遺構には、調査区北端の29層上面で検出されたL字形の溝(SD01)がある。また、調査区中央付近で現代のゴミが投入された石積みの井戸が確認されたが、完掘していないため時期の上限は不明である。

遺物は、小規模な谷状地形の21層より出土した弥生時代前期・中期の土器各1点および23層出土の須恵器2片のみと少ない。



第9図 二ノ門地区東壁断面

4. 池ノ下地区

第10図は、池ノ下地区・前田地区の西壁断面図である。池ノ下地区は調査前は水田であり、調査区東半部分に仮設道路に伴う盛土が認められた。現代の水田以下の堆積物は細粒のものがほとんどである。

遺構の検出された23・24層上面は、池ノ下地区北端から緩やかに南に向かって下がっていき、池ノ下地区南端部が最も低くなっている。

池ノ下地区北半には、掘立柱建物（SB01）や土壤などが確認され、これを中心とする地域が居住域として利用されていることが分かった。

これにたいして池ノ下地区南半には、一部で畠らしい畦状の遺構が認められたうえ、他に居住に関わる顕著な遺構がないことを考えあわせると、畠や水田などの生産の場としての土地利用が想定できる。

遺物は主に北半で出土した。わずかに古墳時代後期や中世後半のものも含まれているが、奈良時代のものが大半を占める。奈良時代の遺物包含層は12層および20層である。

5. 前田地区

前田地区も池ノ下地区と同様、調査前は水田であり、調査区東半部分に仮設道路に伴う盛土が認められる。低い部分には盛土が厚く、現道に隣接する部分については攢乱の程度が比較的大きかった。

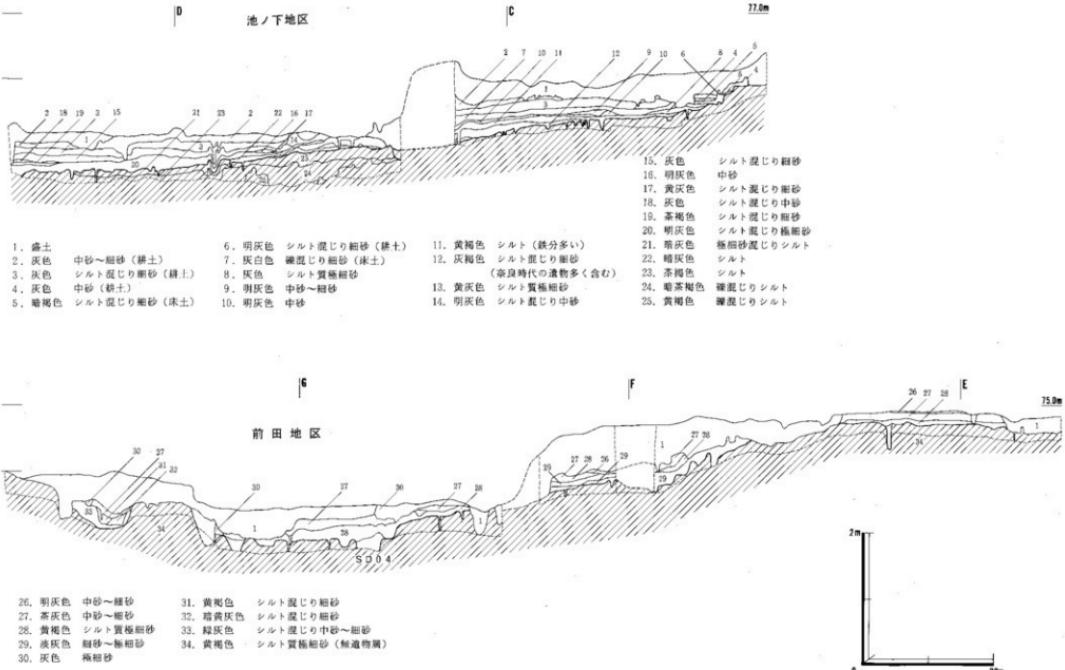
遺構面（34層上面）の起伏は、現地表面のそれに対応している。中央のF～Gライン付近が谷状の地形として落ち込んでおり、この落ち込みの南北両側は比較的高くなっている。

谷状の部分には、3～4層の細粒の堆積物が認められ、最深部には門柳川の旧流路と考えられるSD05が存在する。

これに対して、当地区的北端および南端部では、耕土・床土直下が遺構面になっている。この遺構面は土壤化していないことから、おそらく水田耕作に伴う削平を受けていることが明らかである。

北半で掘立柱建物3棟（SB02・03・04）や柱穴・土壤・溝が検出されており、南半では掘立柱建物1棟（SB05）・柱穴・溝などが検出されている。これらはいずれも34層上面で確認されたものである。

遺物の多くは谷状地形の埋土およびSD04埋土から出土している。奈良時代の遺物はきわめて少なく、11世紀以降の遺物が主体をなし、池ノ下地区との差異は際立っている。



第10図 池ノ下・前田地区西壁断面

第2節 二ノ門地区の調査

二ノ門地区は今回の岡遺跡の調査区の最北端に位置し、調査面積は726m²を測る。

当地区は現在、極楽寺が存在する独立小丘陵の西斜面に相当する。この丘陵は、東西約80m、南北約120mの規模をもち、池ノ下地区の遺構面からの比高差は7~8m程度である。

極楽寺の裏にあたる丘陵の最高所には一辺が10m程度の正方形の土壇が存在する。この丘陵の北および東斜面には段をもつ可能性があるが、南半は極楽寺の建立により、当初の地形を窺い知ることができず、丘陵西斜面においても地形が改変され、かなり急な傾斜になっている。

さらに極楽寺自体が、中世の地方豪族である村上氏の菩提寺であったという点を考えあわせて、この丘陵が中世の館として利用されていた可能性も指摘されている。

今回の調査区であるこの丘陵の西斜面は、西に位置する宮池の影響を受けて削られており、Aライン前後の約30mにわたって急な崖となっている。

検出された遺構は溝（SD 01）1条と石組みの井戸である。このほか、地山の整形痕跡が2地点で確認された。

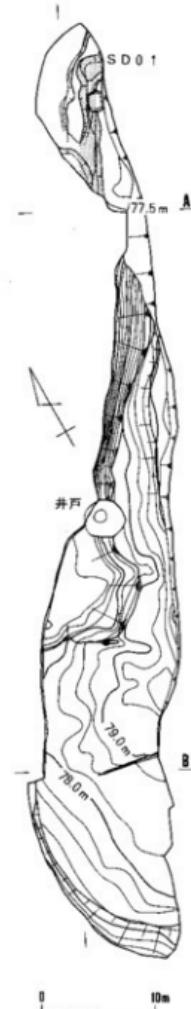
SD 01

調査区北端の29層上面で検出された、平面形がL字状をなす溝である。溝の方向は丘陵の裾を巡るように南東から北西方向へ、そしてほぼ直角に向きを変え、北東から南西方向へとのびる。東端および南端は調査区外にのびている。

溝の幅は、検出面で2.60~4.00m、溝底で1.00~2.80mを測る。深は約10cmである。溝底の比高差は約15cmであり、南方向に緩く傾斜している。

また、地山を割り出した土手が、溝と平行する形で北および西方向に認められる。幅は0.5~3.0m、残存高は約20cmを測る。

遺物は全く出土していないため時期は不明であるが、丘陵を取り巻くようにのびていることから、館に付属する施設である可能性は捨て切れない。



第11図 二ノ門地区
遺構配置図

地山の整形

地山の整形箇所が2箇所で確認された。一つはA・Bラインの中間付近の東壁際でわずかに確認された、水平な地山の削平面であり、もう一箇所はBラインの調査区東半付近である。後者は岩盤である地山を5m以上にわたってほぼ垂直に削っているもので、南側の平坦面を広く確保する意図があるようである。この平坦面の規模は、南北方向で約10mを測る。これら2箇所の平坦面が人工的なものであることは確実だが、時期やその性格は不明とせざるをえない。

井戸

表土直下で検出された。掘り方の直径は約3m、川原石を積み上げた井戸の内法は約1mを測る。最近までゴミ穴として使用されていたものだが、完掘していないため時期は不明である。

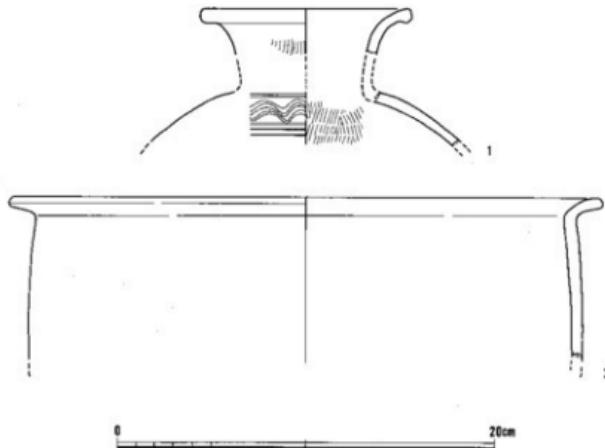
包含層出土遺物

井戸の約10m南の小規模な谷の埋土（21層）から弥生土器が2個体出土した（第12図）。

1は、弥生時代中期前半の壺である。口縁部・体部とも小片である。肩部には櫛状工具による直線文と波状文が施されている。口縁部直径は10.6cmである。

2は、いわゆる如意形口縁をもつ弥生時代前期の甕である。1/8程度の小片である。口縁端部には刻み目をもたず、また口頸部も無文である。口縁部直径は31.6cmを測る。

これらは丘陵上から転落したと考えられるため、調査区外に遺構の存在する可能性が高い。



第12図 ニノ門地区包含層出土遺物

第3節 池ノ下地区の調査

池ノ下地区は、二ノ門地区と前田地区の中間に位置し、中央を横断する道路および水路によって北半・南半に分割されている。調査面積は約1390m²を測る。

出土遺物は奈良時代のものを主体とし、これに古墳時代後期、中世後半の遺物を若干含む。

検出された遺構は、遺構面の高さに対応して、高い部分と低い部分ではその性格が異なっているようである。遺構面の高い北半は居住に関する場として、低地である南半は生産に関する場所としての土地利用がなされていたものと思われる。

北半では掘立柱建物1棟（SB01）と上塙数基（SK01・02など）および溝などが検出された。なかでもSK01は墓址の可能性が考えられる土壤である。また、出土遺物の量も南半に比べてかなり多く、北半が居住域として利用されていたことを裏付けている。

南半では、北東隅で高さ5cm程度の歛状の遺構がわずかに検出されたほかは顕著な遺構がなく、畠や水田などの生産の場として捉えることが妥当であろう。

SB01

SB01は池ノ下地区北半の南端で確認された掘立柱建物である。23層上面で検出された桁行（南北方向）2間、梁行（東西方向）3間の建物であり、棟軸方向はN-77°-Wである。束柱は認められなかった。

規模は桁行方向が7.45m、梁間方向が5.48mである。柱穴間の心々距離は、桁行方向が平均2.50m、梁間方向が平均2.77mを測る。なお、面積は約41m²である。

柱穴の掘り方は円形であり、その直径は9~28cm、深さは6~23cmを測る。柱根を抜きとったためか、柱痕は確認されなかった。

柱内埋土より遺物が出土していないため、正確な時期は不明であるが、直上の包含層出土の土器が奈良時代のものに限定できることから、それ以前の比較的近い時期を考えてよい。

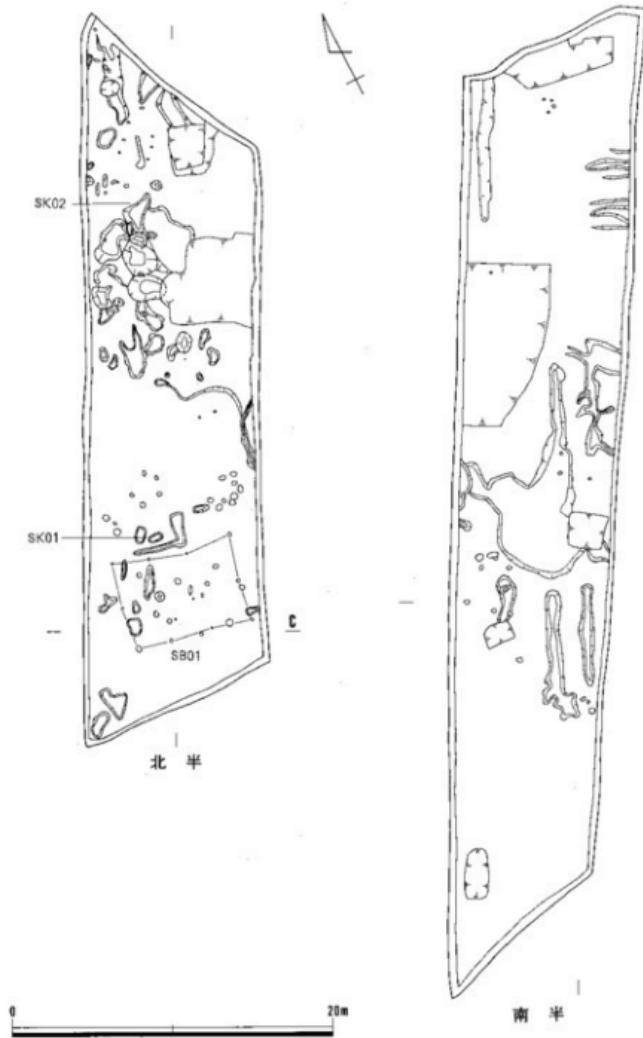
SK01

北半の南寄り、SB01の北側に隣接する土壤である。他の遺構との切り合いは認められない。SB01の棟軸方向と土壤の主軸方向はほぼ一致している。

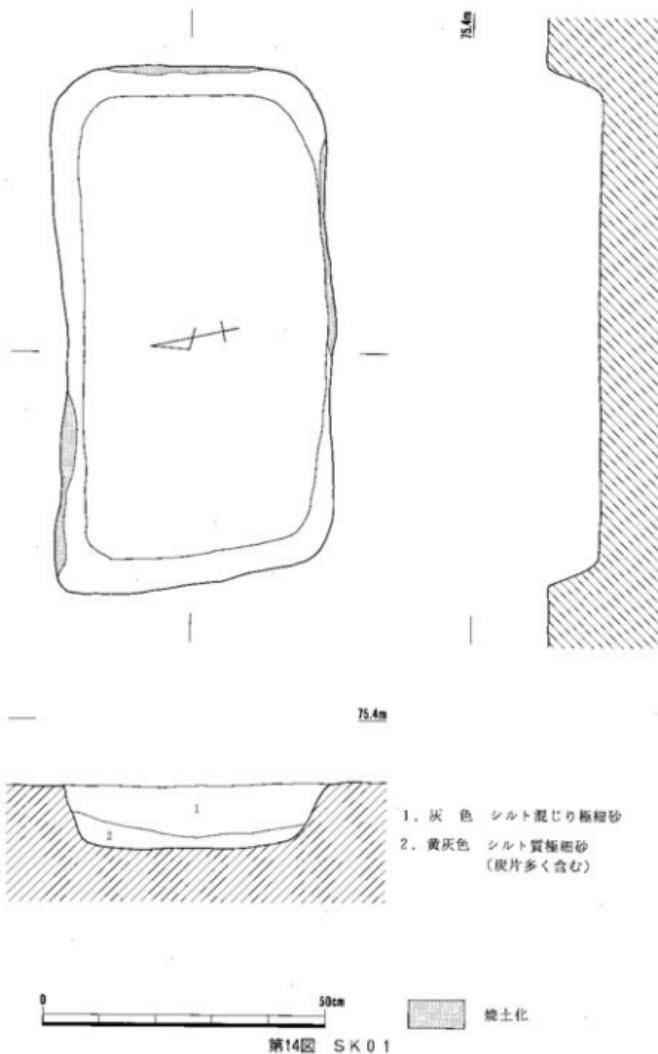
平面形は隅丸長方形であり、長さ92cm、幅47cmを測る。横断面は逆台形を呈しており、検出面から土壤底までの深さは12cmである。土壤底は平坦であり、ほぼ水平である。

埋上は2層に分かれ、下層には炭片を多く含んでいる。なお、土壤壁が検出面から下へ約10cmほど焼けていることから、墓址の可能性も考えられる。

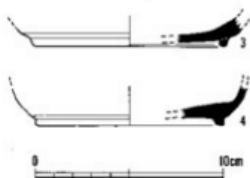
遺物は出土していないが、包含層の土器からみて、奈良時代の所産である可能性が高い。



第13図 池ノ下地区遺構配図



SK 0 2



当調査区の北端の23層上面で検出された不整形の土壙である。規模は長さ2.65m、幅1.35mである。断面形は皿形であり、検出面からの深さは9cmを測る。埋土より奈良時代の須恵器の坏が2点出土している。

3は、高台径約10cmを測る坏Bである。高台の断面形は角張っておらず、丸みをもつ点が特徴的である。内外面の調整は、ロクロ回転を利用したナデである。

4は、高台径約10cmを測る坏Bである。高台は外方にやや短くのび、断面形は角張っている。脚端面は平坦であり、外傾している。底部外面にはロクロ削りは施されておらず、ヘラ切り痕をとどめている。内面の調整は、回転を利用しないナデ仕上げである。

包含層出土遺物

池ノ下地区の包含層からは、古墳時代後期から中世後半の土器が出土しており、そのなかで主体を占めるのは奈良時代のものである。

古墳時代のものは少量であり、5と6を図化したにとどまる。

5は、低いたちあがりと直線的な体部をもつ坏である。器高は低いようである。

6は蓋の可能性も考えられるが、ここでは坏としておく。

奈良時代の土器は須恵器が大半であり、土師器の出土量は全体の1割に満たない。

須恵器・坏A

7は口径12.2cm、器高3.4cmを測る。平坦な底部と、斜上にまっすぐのびてやや外反する口縁部とからなる。底部外面の調整は不定方向のナデであるが、ヘラ切り痕をとどめている。内面は不定方向のナデ仕上げである。

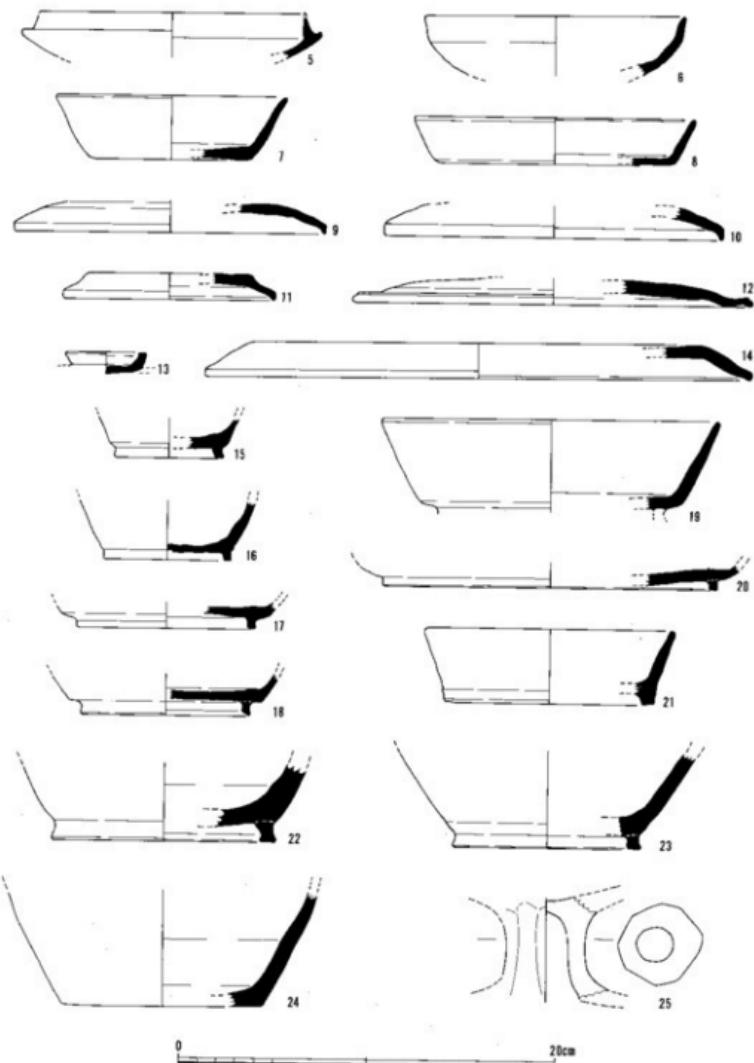
8は口径14.9cm、器高2.5cmを測る。平坦な底部と、斜上にのびる口縁部とからなる。底部外面の調整は7と同じく不定方向のナデであり、ヘラ切り痕をとどめる。内面も不定方向にて仕上げている。外面には、いわゆる火襷をもつ。

須恵器・坏B蓋

いわゆるA形態のもの2点(11・12)、B形態のもの2点(9・10)のほか、硯に転用された頂部のつまみ片を1点図化した。

A形態は、平らな頂部と畳出する縁部とからなる。口径は、11が11.0cm、12が21.3cmを測る。11は頂部外面にナデを施すが、ヘラ切り痕を残す。12は頂部外面に回転ヘラ削りを施す。

B形態は、縁部が屈曲しないものである。口径は9が16.6cm、10が18.0cmを測る。9は頂部外面にヘラ切り痕を残している。



第16図 池ノ下地区包含層出土物（1）

13は環状のつまみをもつ。内面が擦れ、坏Bと組み合わせて観として使用されたものである。

須恵器・皿B蓋

14はA形態の蓋である。ゆるく屈曲する縁部は下方に小さく突出している。口径は28.8cmを測る。頂部外面はナデ仕上げであるが、ヘラ切り痕を残している。

須恵器・坏B

高台をもつ坏である。底部の破片が多いが、大小の区別がある。19は口径17.8cmを測る。

高台は、底部の外縁に貼付けられるもの（16・21）と、やや内側に位置するもの（15・17・18・19）がある。また、その形態については、外方に張るもの（15）は少なく、短く下方にのびるもののが大半である。脚端面の形状は、凹面をなすもの（15）以外は平坦であり、内傾するもの（18）が含まれる。底部外面の調整が判明するもの3点（16・17・18）には、ヘラ削りが施されておらず、ヘラ切り痕を残す。底部内面を不定方向にならぶものがある（17・18）。

須恵器・皿B

底部のみの破片である。底部外面にはヘラ削りは施されておらず、ナデ仕上げである。

須恵器・壺

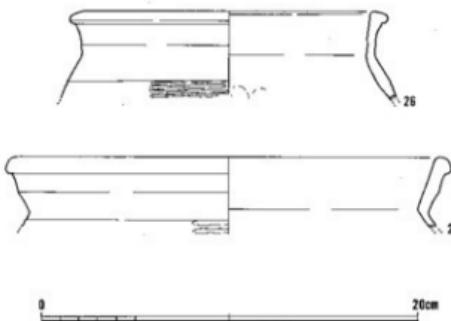
底部の破片3点を図化している。高台をもつもの（22・23）と平底のもの（24）がある。22・24は底部にヘラ切り痕を残している。

土師器・高坏

25は脚台柱状部のみの破片である。八ないし九角形に面取るものである。

土師器・壠

26の口頸部はさほど外方に屈曲せず、口縁端部をつまみだす。27は口頸部が「く」の字形に大きく屈曲し、つまみだした口縁端部を強くなっている。口径は26が15.6cm、27が22.4cmを測る。両者とも体部外面には水平方向の平行叩き、それ以上には回転を利用したナデがみられ、特に27は頸部に強いナデによる段がつく。体部内面にはナデが施されており、叩き痕跡は観察されない。以上のように、出土土器は单一時期のものではなく、7世紀前半（5・6）から、14世紀頃のもの（26・27）までが混在する。ただし、奈良時代の遺物が大半を占めていることはすでに述べたところである。



第17図 池ノ下地区包含層出土遺物（2）

第4節 前田地区の調査

本調査区は、今回の全調査区の南半分を占める長大な地区であり、その中央部を流れる農業の水路によって、さらに北半部と南半部に分かれる。北半部は全長約85m、南半部は約80mで、調査面積約1600m²を測る。

調査区の基本地形は北に高く、南に向かって緩やかに低くなり、北側は池ノ下地区から続く扇状地の丘部分に、南端付近も再び高所となり、その間の谷部にあたる箇所に水路が設けられている。ただ、南端付近には小さな段丘崖が形成されており、東側から張り出す扇状地の先端部分を見ることが出来る。

遺構は、調査区の北部と中央部に集中してみられる。北部には掘立柱建物（SB02）、溝（SD02・03・04他）、土壙（SK03・04他）等の遺構が、比較的狭い範囲に集中する。SD04はSB02に伴う境界溝となる可能性があり、このSB02とSK04、さらにSD02とSD03が重複もしくは切り合う関係にあり、さらに建物自体の方向にもばらつきが見られるため、複数時の遺構が同一面で確認されているものと思われる。

中央部の遺構は調査区の北半部と南半部にまたがって見られ、掘立柱建物（SB03・04・05）、溝（SD05・06）、土壙（SK05）等がある。ここでもSB03とSD05の状況から見るかぎり、単一時期の遺構でないことは明白である。

包含層出土の土器も、8世紀代、12世紀代、13世紀から14世紀に大別できるため、複数期の遺構もこの3時期のいずれかに相当するものと思われる。

SB02

北西部の一部および、南東の隅柱が調査区外となるが、桁行をN-9°-Eの方向にとる6間×4間の縦柱建物址となる。

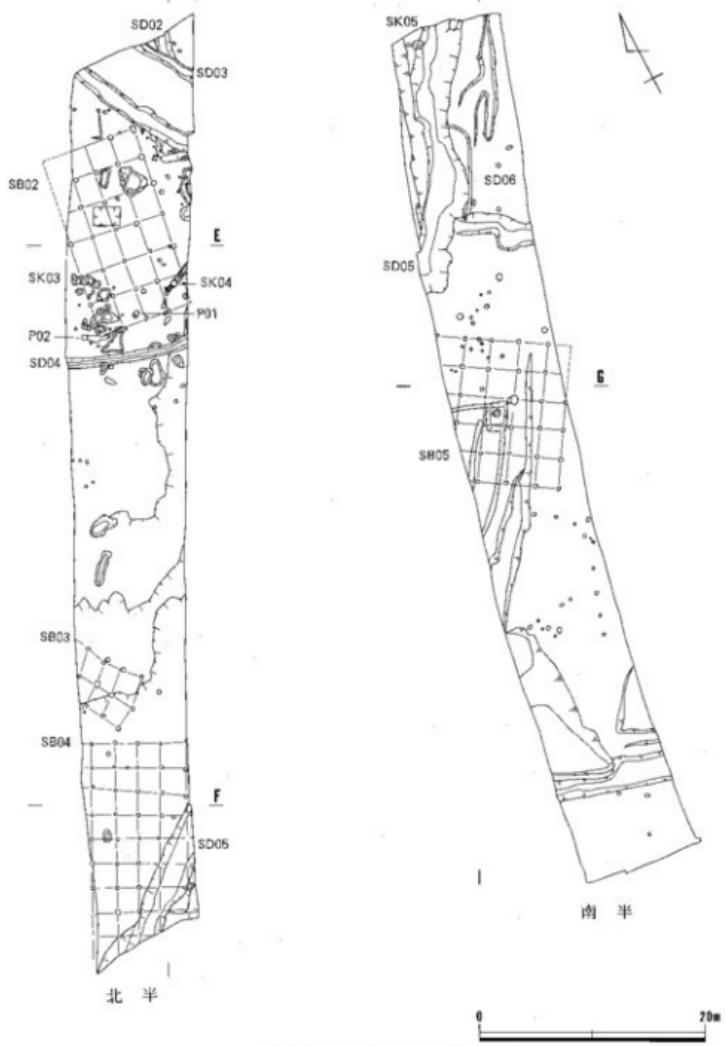
桁行方向が約16.3m、梁間方向が8.6mあり、桁行心々間は3.1～2.5m、梁間間は2.2～1.9mと桁行の柱間が長くなっている。建物面積は、約140m²となる。

柱の掘り方は不定円形で、直径25～55cmとかなりばらつきがある。柱痕はかなり明確に確認でき、直径13～15cmで深さ6～19cmをはかる。

柱穴より良好な遺物が出上していないため時期を決定できないが、そのひとつから中世のものと思われる鉄鎌（M1）と鉄釘（M2）が各1点出土している。

SB03

北半部の27ライン付近に位置する縦柱の建物址であり、谷部へ向かう緩斜面の途中にある。梁間は2間であり、桁行は3間分を確認するが、一方の梁側が調査区外となるため全容はつか



第18図 前田地区造構配置図

めない。また、桁行がN-29°-Wの方位を示している。

柱の掘り方は基本的に不定円形であり径約23~50cm、柱痕の直径は10~19cmとなる。深さは10~30cmであるが、概ね20cm前後である。

柱心々間の距離は、栄間間が2.0~2.9m、桁行間が1.7~2.0mとなり、架間間が長い。

遺物も出土しておらず、他の遺構との切り合い関係もないため、その時期は不明である。

S B 0 4

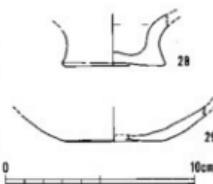
北半部調査区の南端にあり、北半部では最も低い箇所に位置する総柱建物址である。南北方向の柱列が、N-26°-Eの方向を示す。南北方向の柱間で8間分を、東西方向で4間分を検出しているが、北柱列以外の三方が調査区外となるため、そのはっきりとした規模・向き等は確定できない。現状で南北17.1m、東西8.4mを見ることが出来る。

柱の掘り方は不定円形で20~42cm、柱痕は10~16cmあり、深さは14~49cmをみる。

柱は未確認のものも多いが、南北方向の柱心々間距離が1.6~2.5m、東西方向のそれが1.9m~2.3mとなっている。

遺構の検出状態が不十分であったが、SD 0 5埋没後に構築されたものと思われること、柱穴内より出土している若干の土器から判断して、13世紀代の遺構と考えられる。

28は土師器皿の底部である。外面はヨコナデし、内面は不定方向にナデる。29は土師器碗の底部である。体部内外面はヨコナデし、底部外面は糸切りする。



第19図 S B 0 4 出土遺物

S B 0 5

南半部のほぼ中央部に位置する、総柱建物址である。N-34°-Eの方位を示している。

南北方向が5間の12.6mと確定しているが、東西方向は5間の11.8m分は確認しているものの、西側が調査区外となるため全体の規模・方位とも確定することが出来ない。

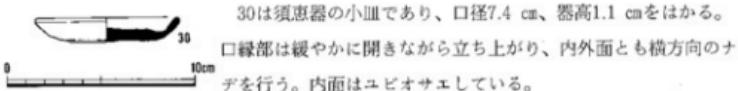
柱の掘り方は不定円形であり、16~40cmとなる。柱痕は9~18cmとなる。

柱間の心々距離は、南北方向が2.3~2.6m、東西方向が2.0~2.6mとほぼ等間隔となっている。この建物址で注目されることは、比高差約60cmの小さな段丘崖をまたいで、東西方向の柱列がとおっていることである。

遺物が出土しておらず、他の遺構との切り合い関係も認められないため、厳密な時期は不明とせざるをえない。

P 0 1

S B 0 2 と重複する位置関係にある、長円形を呈する柱穴である。掘り方の直径は約50cm、柱痕の直径約17cm、深さ約80cmを測る。位置関係からみて、当遺構は建物等に伴わないと思われる。内部からは30をはじめ、土器が若干出土している。



第20図 P 0 1 出土遺物

30は須恵器の小皿であり、口径7.4 cm、器高1.1 cmをはかる。

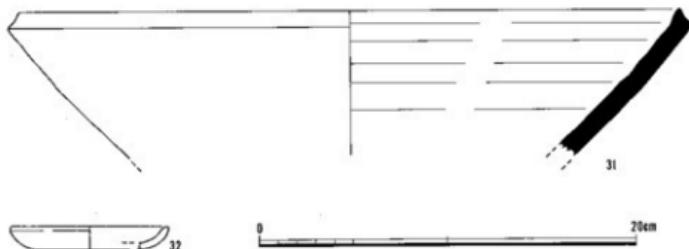
口縁部は緩やかに開きながら立ち上がり、内外面とも横方向のナデを行う。内面はユビオサエしている。

時期は、出土遺物から13世紀代と思われる。

P 0 2

S B 0 2 のすぐ西側に位置する。掘り方は円形であり、直径は約40cmを測る。柱痕は確認されず、深さも約25cmと比較的浅い。P 0 1 同様、建物址の柱穴ではないと思われる。小量の土器が出土している。

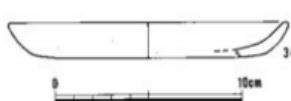
31は須恵器の捏鉢で、口径約35.4cmをはかる。口縁端部は斜めに外傾し、中央が若干くぼむ。32は土師器の小皿であり、口径約8.4cm、器高約1.2cmとなる。口縁部はわずかに内傾しながら開く。いずれも、12世紀代の土器である。



第21図 P 0 2 出土遺物

S K 0 3

S B 0 2 と重複し、その北方に位置する。平面形は不整形で、長径76cm、短径71cm、深さ24cmを測る。長軸を内部からは、33・34が出土している。



第22図 S K 0 3 出土遺物

33は須恵器の小皿であり、口径約8.2cm、器高約1.2cmの小皿であり、口縁部は大きく外反する。底部は糸切りする。34は口径約14.7cm、器高約1.9cmの土師器

中皿である。口縁部はごくわずかに内寄しながら開く。両者とも13世紀代の土器と考えられる。

SK 0 4

SB 0 1 の北端部と重複している。平面形は隅丸方形を呈し、長軸が1.0m、短軸が0.7mとなる。断面形は皿形をなし、深さは浅く約8cmである。12世紀代の土器がわずかに出土している。

35は須恵器碗の底部であり、底径7.6cmをはかる。見込み部分は小さく一段下がり、底部外面は糸切りする。

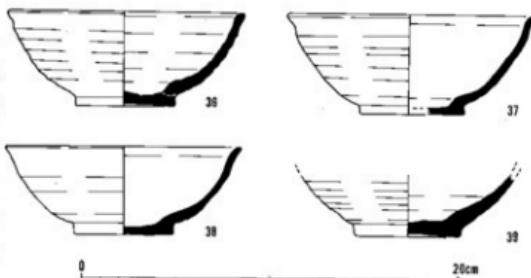


第23図 SK 0 4 出土遺物

SK 0 5

南半部の北辺近くにあり、SD 0 5 の北西肩部に位置する。復元長径1.2m、短径0.8mの平面形小判形になるものと思われる。深さは0.2mあり、断面は皿形を呈する。長軸が北西から南東を示す。内部からは、

12世紀代の完形に近い須恵器碗が、重なり合う状態で4点出土している。



第24図 SK 0 5 出土遺物

36～39は、須恵器の碗である。36～38は見込みが大きく一段下がり、高台も高い。体部は大きく内寄しながら開くが、36・37は口縁部が短く外寄し、38は若干長めとなって丸くおさまる等若干の形態差を含んでいる。39は前記3点より底径が大きく、7.4cmである。見込みの落ち込みも低いため、時期的にもわずかに下がる可能性がある。

口径は36が17.2cm、37が17.8cm、38が17.0cmとなり、器高はいずれも6.8cmである。4点とも底部の切離しは糸切りによっている。

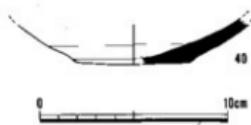
SD 0 2

調査区の北辺にあり、現道下より続く。幅は1.3～1.6m、深さは約30cmあり、断面はU字形を呈する。SD 0 3 によって南端は切られるため、現長約2mをはかる。

内部はほぼ黄茶灰色シルト質極細砂～粗砂によって充填されており、そこから図示することの出来ない程度の、12世紀代の須恵器がごく小量出土している。

SD 03

SD 02 の南端を切るように、南東から北西に流れている。幅は 1m 前後、深さは 25cm を示す。現長は約 5.5m 分を確認しているが、両端とも調査区の外へと伸びている。ここには、今まで使用されていた水路があったため、擾乱されているが、コーナー部分にかろうじて本

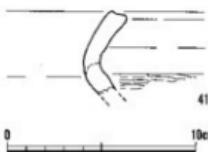


第25図 SD 03 出土遺物

来の溝内埋土である暗灰色シルト質～粗砂の土層が残り、13世紀代の土器が小量出土している。

40は須恵器碗の底部であり、底径約 8.5cm をはかる。底部外面は糸切りされており、高台はほとんどない。内面は全面をヨコナデ調整する。

SD 04



第26図 SD 04
出土遺物

SB 02 の南梁柱列から 2 ないし 2.5m 南側にあり、東南東から西北西に向かってやや北向きの弧を描くように流れてる。幅は

65～110cm あり、深さは 30cm 強をはかる。現長は約 11.3m あるが、両端は調査区外となっている。上半の両肩部がやや崩れているため、断面は二段掘り状を呈する逆台形となる。位置的な関係からみて、SB 02 に関連する可能性が高い。

土層的にも、SB 02 の埋土に類似しており、切り込み面も同一である。

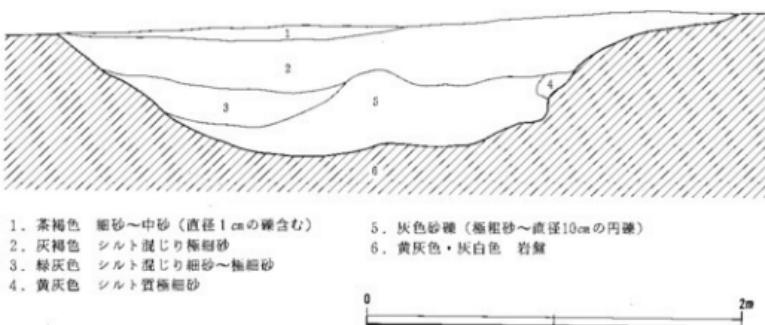
内部からは、13世紀代の土器がごく少量出土している。

41はかろうじて図化できた上師器の鍋である。口縁部は「く」の字形に外反し、端は中央部がごくわずかに窪む狭い平坦面を形成する。外面は頸部以下を横方向に叩き、それ以外は、内面までヨコナデする。

SD 05

調査区のはば中央にあり、北東の扇状地上から谷部を目指して南東方向に流れ。現農業用水路によって、調査区の北半部と南半部に分断されるかたちとなる。北東側では幅約 2.3m、深さ約 0.6m をはかり、南西側では深さは約 0.9m をはかるが、西の肩が調査区西辺に沿って走る擾乱によって破壊されているため、その幅は不明である。

断面は緩やかな「U」字形をなし、下半には黄灰色砂礫層が堆積し、東側の壁がオーバー・ハンギングしていることから、かなり急激な流れがその当初にはあったものと思われる。しかし、上半部に堆積している 1・2 層はシルト混じりの極細砂であることから、その後半にはかなり穏やかな流れとなったようである。



第27図 SD 05 断面図

溝内から大量の土器が出土している。最下層からは、7世紀後半から10世紀代の土器が少量出土する。3・4・5層からなる下層からは、11世紀後半のものが多く、上層の2層からは、12世紀前半の土器が主体を占めており、1層には13世紀以降の遺物が含まれている。

42～45は、7世紀後半の須恵器である。42～44は壺であり底部外面をヘラ切り後にナデている。45は長頸壺で、口縁端部が水平に近く開く。頸部以下は欠損する。

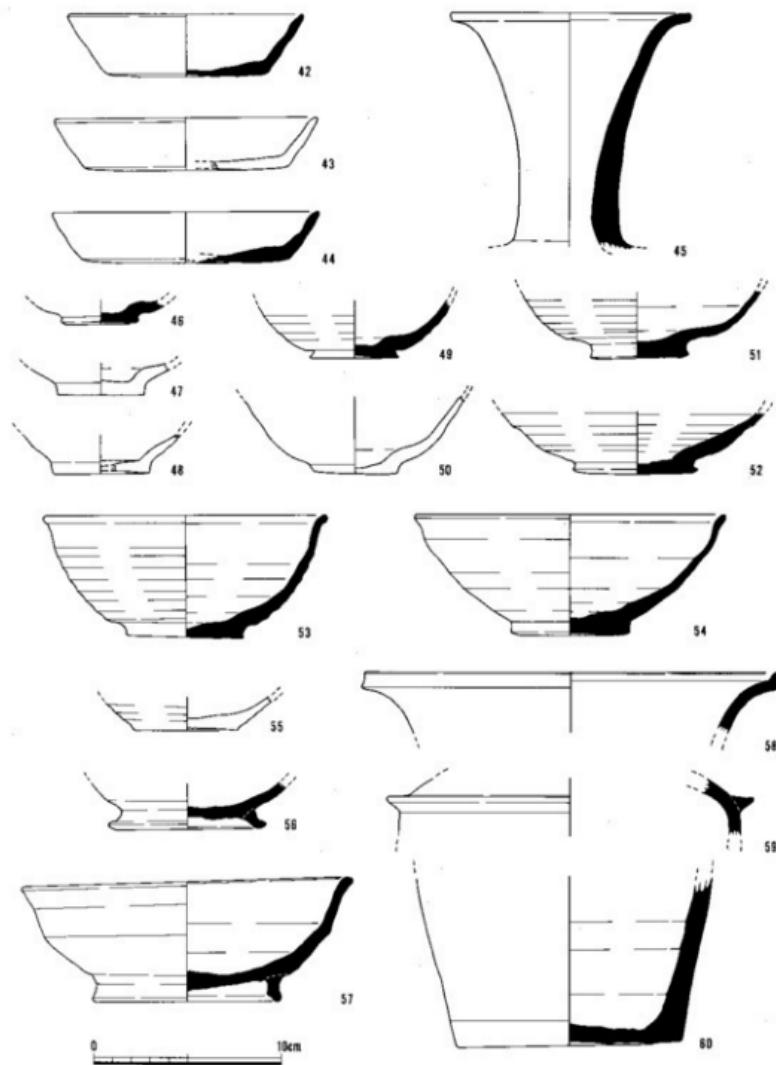
55～57は、10世紀代の須恵器である。55は壺であり、底部外面をヘラ切り調整する。56・57は稜椀である。56は高台が大きく踏張り、端部が水平に広がる。57は器壁が全体的に厚く、稜がかなり鈍くなる。高台はごくわずかに中細りとなり、外面接地する。

46～50は11世紀後半の須恵器である。見込みは段をもって落ち、底径は小さく、高台も高い。口縁部まで残存するものはないが、49・50をみると体部はかなり内湾しながら開くと思われる。51・53は見込みの落ちが小さくなる。53の体部はまだ大きく内湾しながら開き、口縁部は小さく外反して丸くおさまる。口径20.4cm、器高8.9cmである。51・54は体部の開きが浅くなり、口径も22cmと大きくなる。46・47・49・53は底部を糸切りし、48はナデおよびユビオサエ、51はヘラ切りしている。

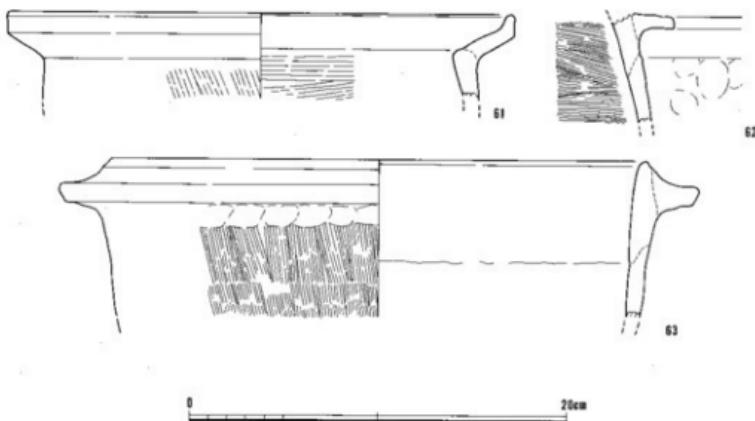
61は甕の形態を止める。口縁は「く」の字に外反し、端部は短く垂直に立ち上がる。体部外面は縱方向に刷毛目調整し、内面は横方向に板ナデする。口径は約35.8cm。62は羽釜の鋤部分であり、細く長く伸びる。内面は横向方に板ナデする。

残る土器は、12世紀前半のものである。52の見込みは段をもって落ちるが径は大きくなり、体部も大きく開く。54の底径は前代と同様程度であるが、体部に丸味がなくなり、口縁のみ小さく外育する。口径は22.4cm、器高は8.7cmとその器高指数が小さくなる。

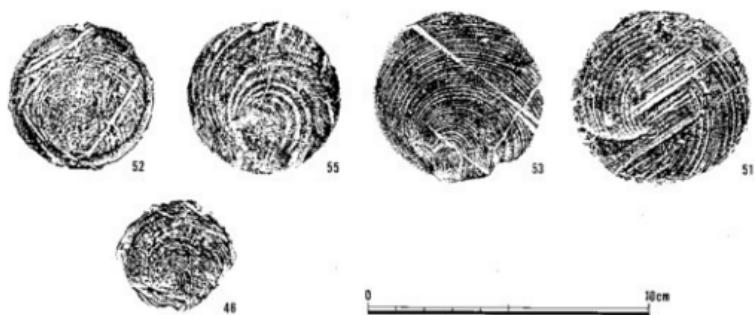
58～60は同一個体ではないが、壺の部分である。58は大きく開く口縁部であり、端部が小さ



第28図 SD 0 5 出土遺物 (1)



第29図 SD 0 5 出土遺物（2）



第30図 SD 0 5 出土遺物拓影

く垂直に立ち上がる。59は肩部であり、圓線が1本残存している。本来は耳付きの壺と思われる。60は底部外面をナデ調整する。63は土師器の羽釜であり、鍔が口縁端部から連続する。体部外面は縦方向に刷毛目調整する。

SD 0 6

南半部の北側で検出された溝で、北東から南西に流れる。北東端は大きく弧を描いて北西方向に曲がる。本来SD 0 5 が埋没後に構築されたものと思われる。幅約20cm、深さは浅く約5cmである。溝内からは土器が出土していないため明確な時期は不明であるが、SD 0 5との関

係から、12世紀以降の遺構と思われる。

包含層出土の土器

前田地区は遺構面までが浅いため、包含層も相対的に薄い。特に北半部の北側と南半部の南側は扇状地の丘部となるため、ほぼ旧耕土下が遺構面となっていたものと思われる（調査に先行するは場整備により耕土が持ち去られているため、第10図の断面図では仮設道であった盛土直下が遺構面あるいは包含層となっている）。よって、包含層は遺構面の低くなる、扇状地地形間の谷部に厚く堆積する状態となっている。

包含層内から出土する土器は8世紀代から14世紀代の土器であるが、池ノ下地区ほど8世紀代の土器は多くなく、その中心をなすのは11世紀以降の土器である。

64～66は8世紀代に属する須恵器である。いわゆる64は环A、65は环Bであり、66は高坏である。64は口径が大きく、体部が直線的に開く。65の高台は比較的内付きであるが、低く踏張りが弱い。66は脚端部のため、形状を知り得ない。

67～70は須恵器の小皿である。68は环様に器高が高く、体部が直線的に開く。口径約7.5cm、器高約2.0cmをはかり、11世紀代に属すると思われる。68は体部が「く」の字形に屈曲し、口径は約6.6cm、器高は1.4cm。69は体部が緩やかに内弯し、底部に高台状の切り残しをもつ。口径約8.2cm、口径約1.3cmである。兩者とも12世紀代のものである。70は体部が直線的に開き、口径7.8cm、器高1.5cmをはかる。13世紀の土器である。

71～75は、概ね11世紀後半から12世紀代に納まる須恵器の椀である。71・75は底径が小さいが、見込みの落ちがない。体部以上を欠損するが、かなり開き気味になるものと思われる。75は大きく開くと思われる体部外面に、2条の籠描き沈線が巡る。底部は糸切りする。

76・77は、貼りつけの輪高台を伴う椀である。胎土が緻密で灰白色を呈するため、東海産の須恵器と思われる。高台の形態に違いが見られる。

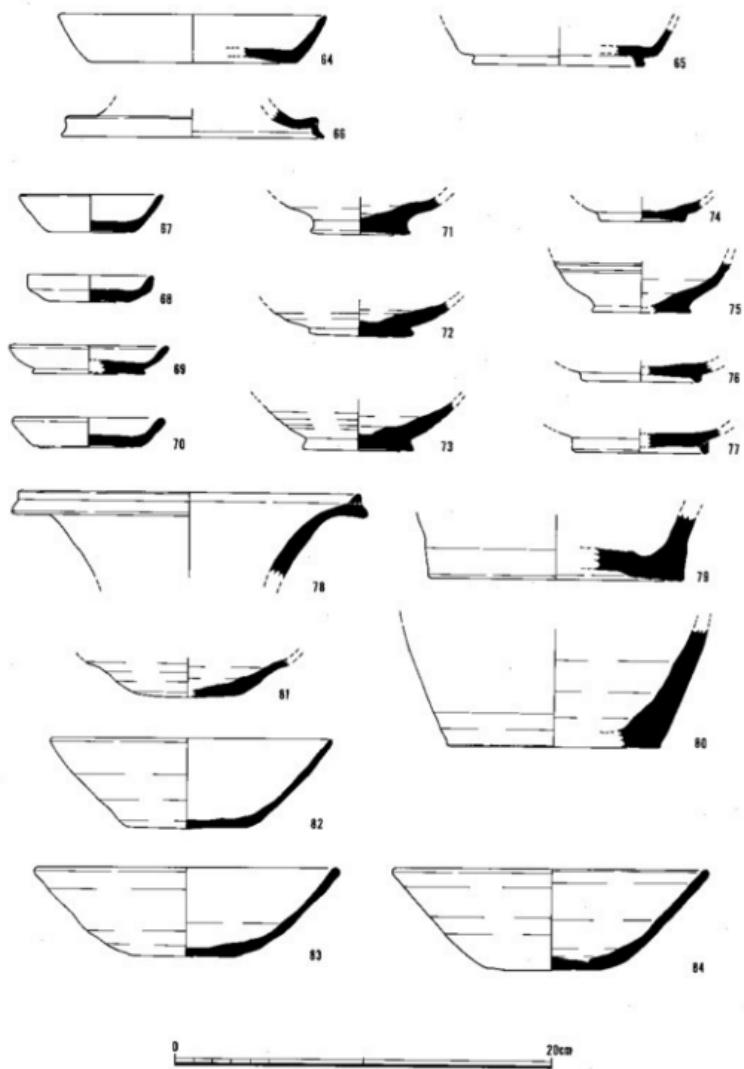
81～84は13世紀代の須恵器椀である。口径はかなり大振となり、底部の高まりがなくなるため、器高指数が小さくなる。82が口径14.8cm、器高4.8cm。83が器高16.1cm、器高4.8cm。84が口径16.5cm、器高5.4cmをそれぞれはかる。81は底部をヘラ切りするが、他は糸切りである。78～80は須恵器の壺である。78の口縁部は大きく外反し、端部が三角形状に上方に肥厚する。口径は約19.2cmである。79は若干上げ底気味となり、80は体部にわずかな丸味を持つ。

85～89は須恵器の押鉢である。

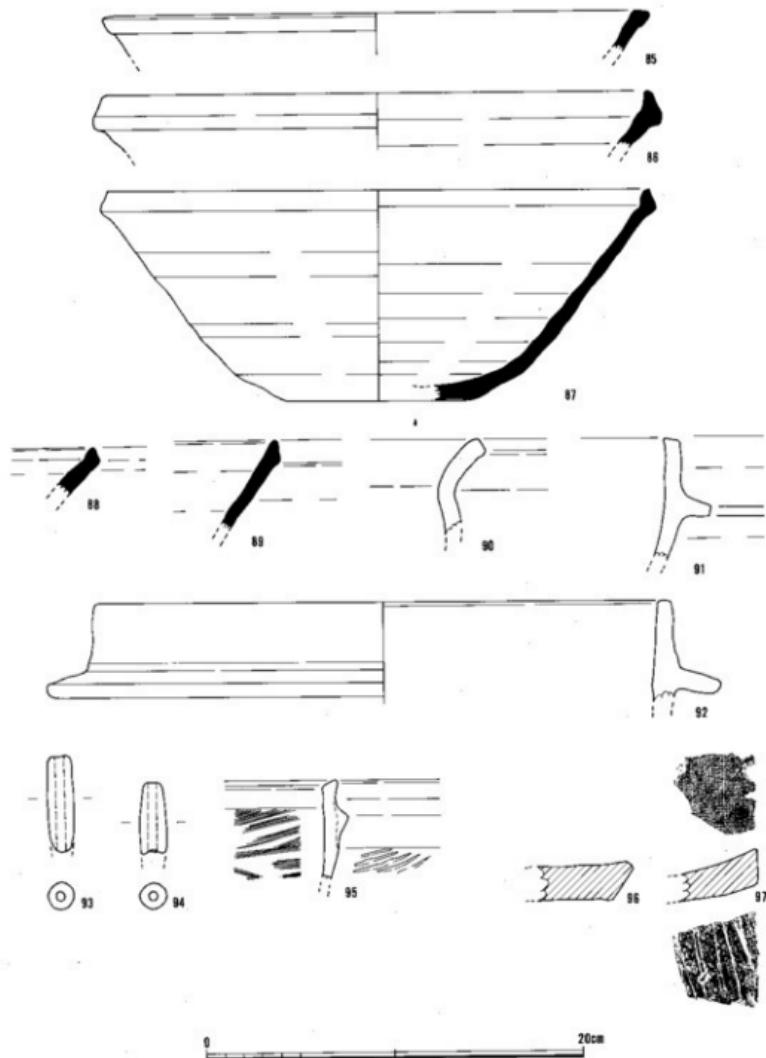
85は径約29.3cmの口縁部である。その端部は若干外側に肥厚するものの、上端は狭い平坦面となるため、11世紀（後半）におさまると思われる。

88・89は細片であるが、口縁端部が外傾する狭い平坦面となる。

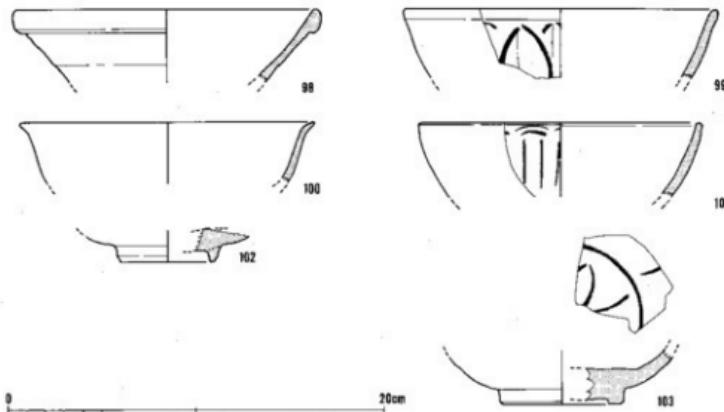
86・87は口縁部が小さく開いた後、端部が内傾しながら短く立ち上がる。86は口径約28.9cm。87は底部付近に丸味を残すものの、体部はほぼ直線的に開き、口径約28.8cmとなる。



第31図 前田地区包含層出土遺物（1）



第32図 前田地区包含層出土遺物（2）



第33図 前田地区包含層出土遺物（3）

90は土師器の甕ないし鍋であるが、細片のため詳細は不明である。

91・92は土師器の羽釜である。91は細片であるが、口縁部は高く、端部は外傾する狭い平坦面を持つ。羽も比較的長い。92も口縁部は直線的に長く伸び、羽部は先端がやや下がり気味に長くなる。口径約31.1cmをかる。いずれも、12世紀代の土器である。

93・94は土師質の土鍤である。93は円柱形をなし、現長約5.2cm、径1.4cm。94は半存であるが、なつめ形になるものと思われる。現長約3.9cm、径1.4cmとなる。

95は土師器の鍋であり、口縁部は短く立ち上がり、端部は内傾する。外面口縁部直下に断面山形の段を設け、体部とを分けている。外面は段以下を横方向に叩き、内面は密接しない横方向の刷毛目を施す。細片のため、口径は不明である。

96・97は瓦である。いずれも側辺をへら切りしている。96は凸面にいわゆる「はなれ砂」が認められるため、型作りによって成形されたことが分かる資料である。97は表面に布目を残し、裏面はへラケゼリする。

98は白磁、99～103は青磁であり、13～14世紀に属するものである。98は大きな玉縁口縁を持ち、口径は約16.1cmである。99・101・103は蓮弁文碗である。99は口径約16.6cmで、蓮弁には明確な凌ぎが見られるが、101はやや異型となっている。101は口径約15.1cmである。103は削り出し高台を持つ底部であり、見込みに蓮弁文状の文様がみられる。100は端反りの口縁となる碗であり、口径約15.8cmをかる。102は貼り付け高台の底部である。

前田地区出土の石器

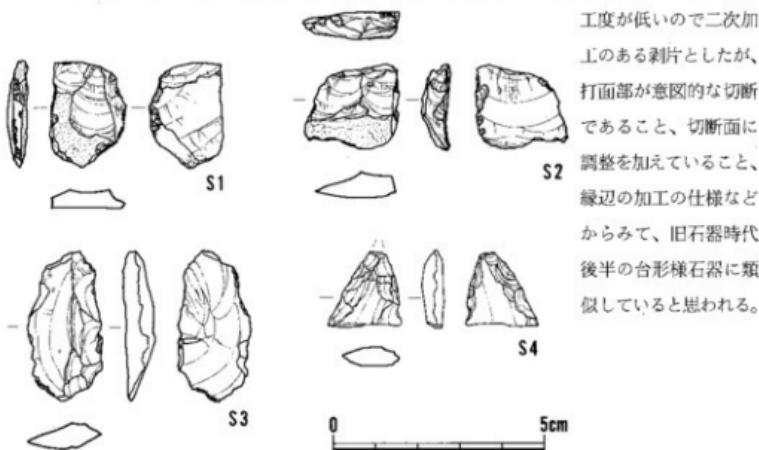
S 1 は、包含層出土のチャート製の二次加工のある剥片である。背面左側切断面に細かい調整剥離がみられ、右側縁部にも連続する形で背腹両面からの微細な加工痕が観察される。しかし、整った刃部を持たないところから、二次加工のある剥片と思われる。

S 2 も包含層出土のチャート製の二次加工のある剥片である。腹面の左側面部に、非常に細かい加工痕と打点が潰れ状の調整剥離が観察される。しかし、これも加工度が低い点と明確な刃部を持たないことから、二次加工のある剥片とした。

S 3 は、SD 04 上層出土のサヌカイト製の剥片である。背面左端部に剥離痕が見られるが、使用によるものかどうかは不明である。また、打点の形状からみて横剥ぎ剥片に類似しているが、断定はできない。

S 4 は、包含層より出土したサヌカイト製の木葉形尖頭器である。先端部は厚みがあり、両面に調整剥離痕をみせるが、全体に穢の磨耗が著しく丸みをおびてしまっている。

今回出土したチャート製の剥片は、2点とも縁辺に調整剥離がみられるものの、全体には加



第34図 前田地区出土石器

第2表 前田地区出土石器観察表

図番号	器種	石 材	出土地	長さ(mm)	幅さ(mm)	厚さ(mm)
S 1	一次加工のある剥片	チャート	包含層	25.2	18.1	4.2
S 2	二次加工のある剥片	チャート	包含層	20.5	22.5	6.0
S 3	木葉形尖頭器	サヌカイト	包含層	18.1	17.9	4.4
S 4	剥片	サヌカイト	SD05上層	35.2	17.9	6.4

前田地区出土の鉄器

M 1 は、SB 0 2 南東隅より 1 本西の柱穴掘り方埋土より出土した鉄釘である。折り返しにより、頭部を作り出し、体部の断面形は、 4×6 mm の長方形を呈する。

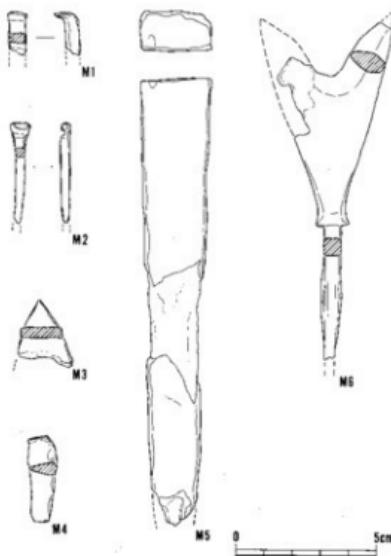
M 2 は SB 0 4 付近の包含層より出土した釘である。頭部は薄く平坦に叩き延ばしたあと、端部を巻き込むように折り返すことにより成形している。体部の断面は、 3.5×3.5 mm の方形である。

M 3 は SB 0 3 付近の包含層より出土した小片である。両側縁に刃を作り出しているため、鉄鎌とは考えられない。

M 4 は SB 0 3 付近の包含層より出土した用途不明の小片である。断面は三角形であり、左側縁に刃部を形成している。

M 5 は、SB 0 4 付近の包含層より出土した先細りする角棒状の製品であり、上端は平坦である。

M 6 は、M 1 とともに SB 0 2 を構成する柱穴の埋土より出土した。いわゆる雁股式の鉄鎌であり、刃部および茎の先端を欠失している。茎中央部は錆化によりふくれているが、本来の茎の断面形は一辺 6 mm の正方形を呈している。復元される刃部最大幅は、約 5 cm である。



第35図 前田地区出土鉄器

第3表 前田地区出土鉄器概要表

図番号	器種	出土地	長さ (cm)	最大幅 (cm)	厚さ (cm)
M 1	釘	SB 0 2	1. 5 + α	0. 6	0. 40
M 2	釘	包含層	3. 6 + α	0. 7	0. 35
M 3	不明	包含層	2. 4 + α	1. 9 + α	0. 40
M 4	不明	包含層	3. 1	1. 0	0. 40
M 5	鑿	包含層	1. 5. 9 + α	2. 5	1. 40
M 6	鑿	SB 0 2	1. 2. 0 + α	4. 0 + α	1. 20

第4章　まとめ

黒田庄町は旧播磨国に属する多可郡の北端にあたり、丹波国との旧国境を形成していたため、同地域で頻繁に国境紛争が発生していたことが『播磨風土記』にもみることができる。その一方で、加古川を仲介として両国間の政治的・経済的な縁帶となっていたものとも思われる。

同町内における発掘調査例は未だ少なく、従って岡遺跡と同時期となる平安時代末から中世にかけての遺跡の調査例も少ないため、その実態をつかむまでにはいたっていないのが現状である。文献史料では、第2章で示したように同時期の状況が若干記載されている。それによる同町内には「這田庄」と「黒田庄」の二つの莊園が存在していたことが示されている。這田庄が記されている『源頼朝下文案』は寿永3（1184）年の記載であり、まさに岡遺跡の存続していた時期とも一致するものである。地理的にいっても加古川左岸にあたる莊園であり、後世には久我家の支配する黒田郷と守護赤松家の治める津万郷・東条郷に分裂するようである。一方の黒田庄は加古川の右岸を中心とする一帯であり、平等院領に属するため、直接的には岡遺跡とは関係しない莊園である。このように、当時の黒田庄町は加古川を境にして、久我家領の這田庄黒田郷と平等院領黒田庄に分かれていたこととなる。

黒田庄町南部の中核を成す喜多・大門地区は加古川の形成した低位河岸段丘に開けるのに対し、岡遺跡が所在する岡地区は門柳谷口に発達した扇状地上に位置する。同地区の中心となるのが、岡遺跡の北側に鎮座する式内社の「兵主神社」である。主殿を中心としてその主立った建物の屋根は、「葦葺き」の特徴的な様式を用いる神社である。また、地元の口承によると、神社は本来岡の南に当たる福地に祭られていたものが、いつの時期か現在の場所に移ったとの話が伝わっている。現在でも神事の際には、福地の御靈（ごりょう）神社から御神体が神輿に乗って兵主神社に渡り、その日の内に再び同神社に帰るのはその名残だということである。また、同社は託賀（多可）軍團の守護神とし奈良時代に建立されており、丹波国との対峙関係が反映された迷地であったことも考えられる。こうした兵主神社の周辺では、最近は場整備等に伴う発掘調査により、岡・古門遺跡をはじめとして弥生時代から続く複合遺跡が確認されるようになったことから、岡地区の扇状地上にはかなり広い範囲で複数時の遺跡の存在が明らかになりつつあるが、未だその実態を知り得る資料が少ないので現状である。

今回の調査区が扇状地の末端部分に位置しているため、扇状地上に展開していた岡遺跡がさらに河岸段丘まで広がっていることが明らかとなった。今回の調査では11世紀から13世紀の遺構を検出したものの、岡・古門遺跡で確認されたような弥生時代の遺構は確認されていない。さらに、同町教育委員会による調査により、河岸段丘が奈良時代前後の時期になって安定はじめ、居住城として利用されたことが知られるようになってきた。

今回の調査では5軒の建物址が確認されたが、13世紀代に属するSB03とSB04でもその方向が大きく異なっているため、各時代別による建物の方向性はさほど意識されていないようと思われる。また、調査区の幅が約10mと狭いため、遺跡全体の性格を把握するまでにはいたらなかったが、南北約300mと延長の長い調査により、11世紀から13世紀の遺構が扇状地のほぼ全域にわたって存在していることが知られるところとなった。今後の調査の進展によっては、戦の神である「兵主神社」に関連する遺跡の存在をみる可能性も十分にある。

調査区の北端にある極楽寺は、扇状地の西端に突き出した小さな舌状地形の上に位置している。寺伝によると、元来岡集落の南東=岡古墳群の立地する谷部の奥にあったものが、中世以降の時期に、今の場所に移ってきたとのことである。また伝承によると、この場所は中世に這田庄に勢力を張っていた「村上」氏に関連する居館のひとつとされている。現在の地形をみてても、西側に宮池、東側に小山池があり、北側は周囲より一段低い低地形となっている。南側は調査の結果から自然地形による小さな谷を掘代わりに利用していたことが判明した。このように、この居館址は東側の扇状地とは完全に切り離された体裁を示しており、居館としての地理的条件を満たしたものである。平面形も、東西約80m、南北約120mの方形であり、南半分は極楽寺によって削平を受けているが、裏手となる北側は一段高く、一面平坦になっている。さらに、その中央部には一辺11m程度の基壇状の高まりが残存している。また、法面が大きな傾斜をもって立ち上がることからも、人為的に作り出された地形といえよう。さらに、北側の低地部には、空堀の痕跡を思わせる窪みが法面に沿って走っており、その一部が調査区にもわずかに入り込んでいる。こうしたことから考えて、極楽寺の寺域が中世の方形居館址を利用したものであることは間違いないと思われる。ただ、調査区が宮池と極楽寺の間にあたるため、積極的にこのことを肯定する遺構、時期を決定する遺物等は確認されなかった。

調査結果が史実を語るには今少し具体性に欠けるものとなり、中世に当地に置かれていた這田庄・黒田郷の実体に迫るにはほど遠いものとなってしまった。今回は調査区の制約もありこの様な結果となったが、今後周辺の調査結果が公開された際には、改めて大きな意味合いをもつことになろうかと思われる。

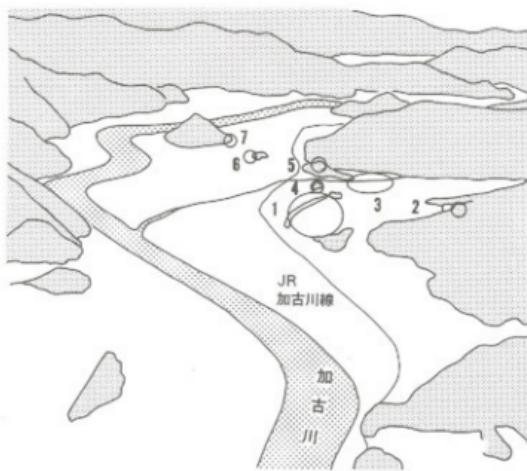
写 真 図 版



岡の辻堂



岡遺跡の遠景



1. 岡遺跡
2. 岡古墳群
3. 岡・古門遺跡
4. 兵主神社
5. 城山
6. 天神前古墳群
7. 喜多古墳群

図版 1



岡遺跡の位置



二ノ門地区全景（空中写真・北から）



二ノ門地区全景（南から）



SD 01 (南から)

図版 4



地山の整形箇所（西から）



井戸（西から）



池ノ下地区全景（空中写真・北から）



池ノ下地区北半部全景（北から）



S B 0 1 (北から)

図版 7



SK 01周辺の遺構（西から）



SK 01（西から）



池ノ下地区南半部全景（南から）



池ノ下地区土層断面（西から）



前田地区全景（空中写真・南から）

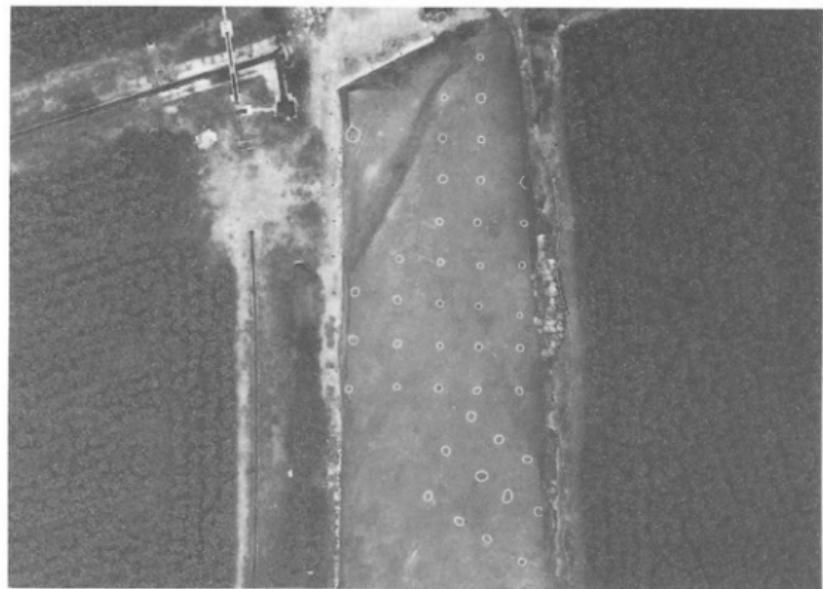
図版 1 0



SB02とSD04（空中写真・東から）



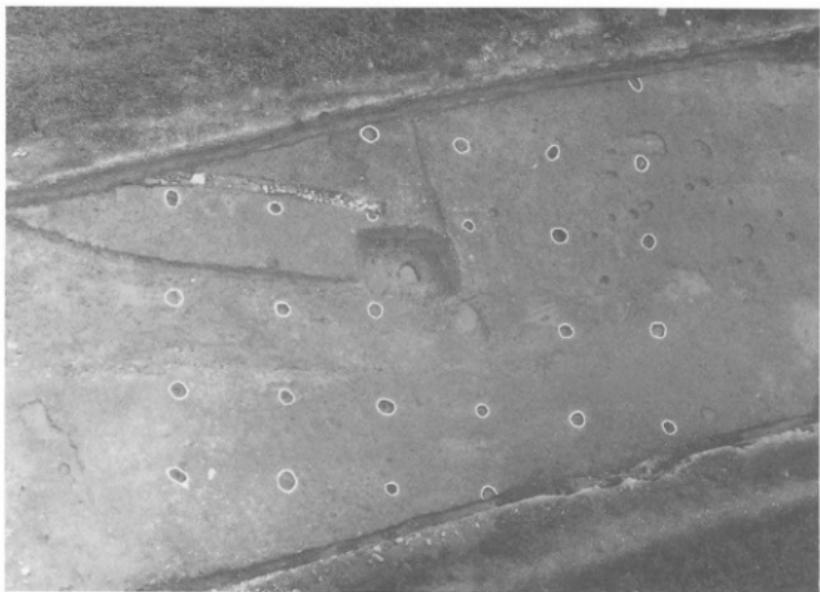
SB02とSD04（北から）



SB 03・04、SD 05 (空中写真・北から)



SB 03・04、SD 05 (空中写真・南から)

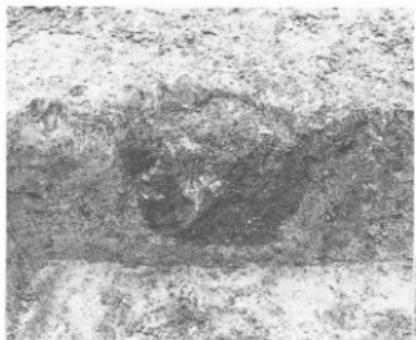


SB 05 (空中写真・南東から)



SB 05 (北から)

図13版



SB03柱穴断面



SB03柱穴断面



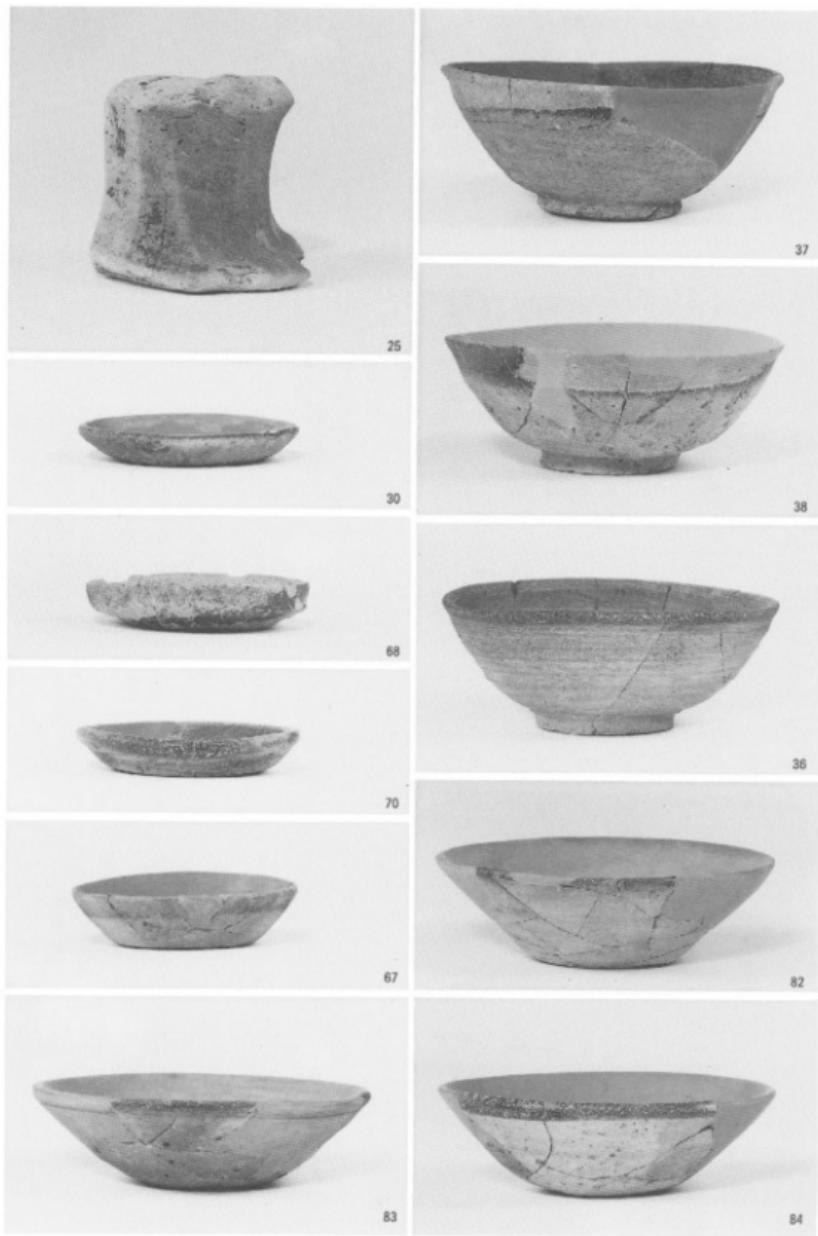
SD04（西から）



SD 05 南半部（南から）



SD 05 断面（南から）



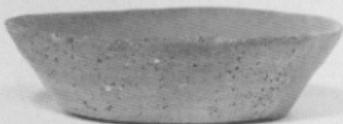
図版 1 6



44



43



42



57



54



53

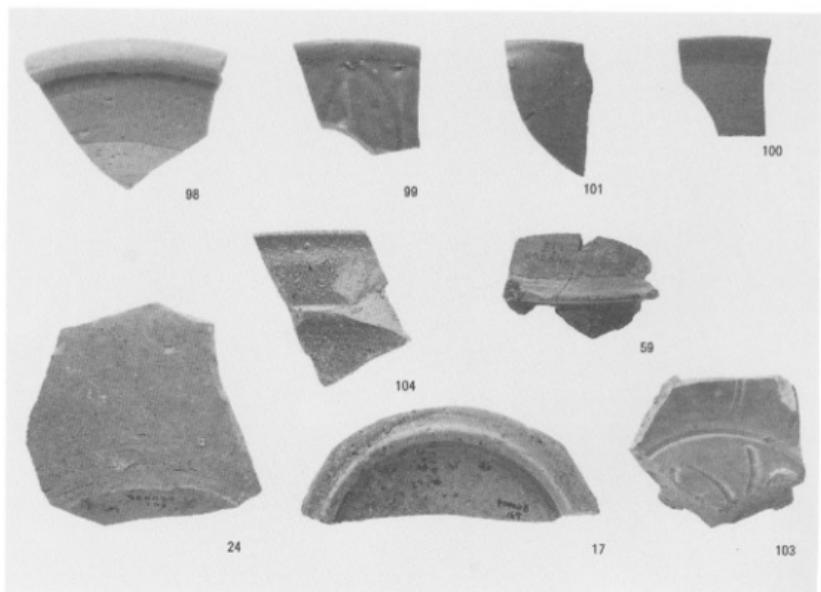
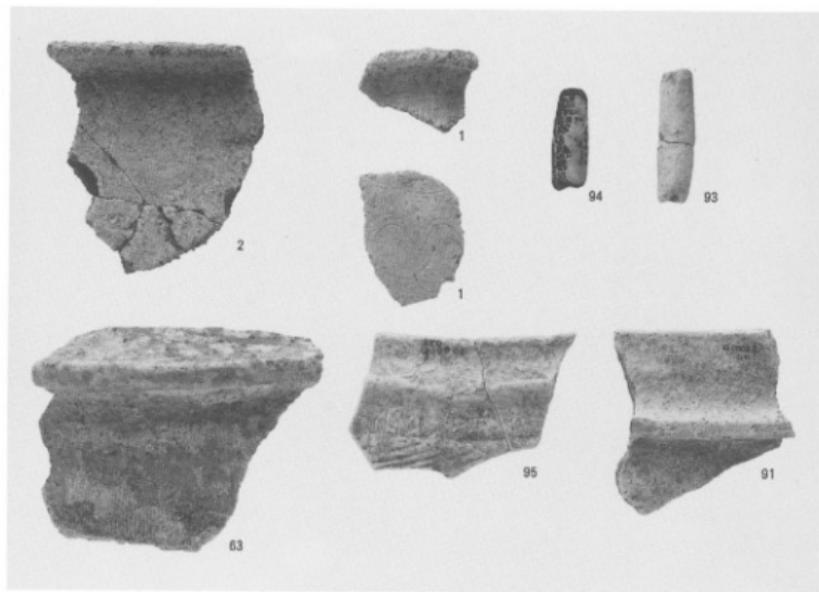


45

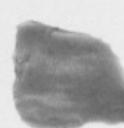
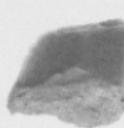
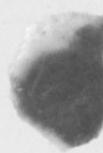


60

図版 17



図版 1.8

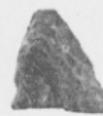


S1

S2



S3



S4



M1



M2



M3



M4

M4

M5

M6

兵庫県文化財調査報告 第119冊

岡 遺 跡

- 県道黒田庄塩界線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 -

平成5年3月31日発行

編集 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

〒652 神戸市兵庫区荒田町2丁目1番5号

TEL 078-531-7011

発行 兵庫県教育委員会

〒650 神戸市中央区下山手通5丁目10番1号

印刷 株式会社 精文舎

〒652 神戸市兵庫区下沢通6丁目2-18
